

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

大袋 II 遺跡

発掘調査報告書

1 9 8 1

群馬県館林市教育委員会

序

館林市教育委員会
教育長 福田 郁司

大袋Ⅱ遺跡の発掘調査報告書をおとどけいたします。

昭和55年度、56年度の2ヶ年にわたり調査されたこの遺跡は、館林の原始・古代を知るうえで貴重な資料を数多く残してくれました。

今を去ること數千年前、縄文時代と呼ばれる頃の“館林”の集落を、かい間見せてくれました。

それは、人々がまだ、生きることに全精力を傾けていた頃、「棲む」ことから、「住む」ことへと、人々の知恵が結集されようとしていた頃かも知れません。

人々の知恵が結集され、花吹いた文化の蓄積が歴史の一部であるなら、文字で読み取る歴史以前は、物を通して知る以外にはありません。

出土した大きな土器を手に耳をそばだてるとき、地域に根ざし、地域に生きた、遠い先人の息吹が感じられ、縄文の世の人々のメッセージの重みを感じます。

時の流れの中で、この遺跡を含む大袋の地に、再び住居群がもどろうとしています。新しい時代とともに、新しい集落が生まれ、明日への生活が営まれようとしています。

遺跡が示す過去と同様大切にして行かなければなりません。

大袋Ⅱ遺跡が残した数多い資料を、この報告書にかえて、“土”が語ろうとした歴史を、つたないながらも伝えて行きたいと思います。

この調査にあたり、終始かわらないご助力を賜わりました、県教育委員会をはじめとして、地権者、区画整理課、その他関係者の方々、また、からっ風吹きすさぶ厳寒の調査から、肌に痛い酷暑のなか、身をもって発掘調査にあたられた、作業員の皆さま、その努力と成果に深く感謝申し上げます。

最後に、本調査にあたり、暖かくご指導くださいました多くの方々に心から感謝し、お礼を申しあげます。

昭和57年3月31日

例　　言

1. 本書は、館林市大字羽附字大袋地内に所在する大袋II遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、館林市東部第三土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査である。
3. 本発掘調査の主体は館林市教育委員会であり、その組織は次の通りである。

教育長　　福田郁司

教育次長　　河内隼一

事務局（館林市教育委員会　文化振興課　文化財保護係）

課長　　鎌田正弘

係長　　鶴原隆夫（56年7月まで）、橋本賢一（56年7月から）

主査　　三田正信（56年7月昇格）

主事　　鶴原百合子（56年4月まで）

学芸員　　岡屋英治、新藤紀子（56年4月から）

調査作業員（発掘・整理）児玉隆司・越沢かつ・飯塚てう・泉田登美子・島田とも子・中里昇・川口和子・齊藤景子・武藤けい子・青山朗・福島吉晴・片口幸之助・渡辺征美・岡田光二・市川与志松・田代正道・田代幸枝・片山クニ・橋本博行・大塚泰宏・志村岩男・齊藤喜美枝・坂田雅美・酒井明子・山口晴子・觸木幸代・巻川源司

4. 調査期間は、55年11月～57年3月まで行った。
5. 調査に伴う諸経費は、55年度、国（2000000円）、県（600,000円）補助による5460000円、56年度、国（3,750,000円）、県（1,125,000円）補助による8,071,000円、の総額13,531,000円である。
6. 本報告書の図面作成・トレイスは、岡屋・新藤・齊藤・川口・島田が行い写真撮影・編集は、三田・岡屋・新藤・齊藤が行った。
7. 本報告書中、ローム、攪乱、焼土等にはトーンを使用した。
8. 調査から、報告書刊行にあたり、下記の方々、諸機関に御指導、御教示、御協力いただいた。記して感謝いたします。（敬称略・順不同）

新井房夫・沢口宏・能登健・洞口正史・伊藤晋介・大塚昌彦・田村吉久・谷津義男・岡田喜代次・県教育委員会文化財保護課・市都市計画課・市区画整理課・東部第三土地区画整理事業組合準備委員会・館林高校社会研究部・館林女子高校社会研究部

目 次

序

例 言

本文目次	1
挿図目次	2
写真図版目次	4
第1章 調査に至る経過	6
第2章 遺跡の環境	9
第1節 遺跡の地理的環境	9
第2節 遺跡の歴史的環境	10
第3章 調査の経過	15
第4章 基本土層	20
第5章 遺構と遺物	22
第1節 第1号住居址	22
第2節 第2号住居址	25
第3節 第3号住居址	29
第4節 第4号住居址	35
第5節 第5号住居址	40
第6節 第6号住居址	43
第7節 第7号住居址	47
第8節 第8号住居址	52
第9節 第9号住居址	56
第10節 第10号住居址	58
第11節 第1号炉穴	60
第12節 第2号炉穴	64
第13節 第3号炉穴	66
第14節 遺構外出土遺物	68
第15節 石器	73
第6章 調査の成果と問題点	83
参考文献	
写真図版	

挿 図 目 次

- 第1図 大袋II遺跡現況図
- 第2図 館林市周辺の地形
- 第3図 館林市周辺の地形図
- 第4図 周辺の遺跡
- 第5図 A地点全体図
- 第6図 B地点全体図
- 第7図 C地点全体図
- 第8図 土層柱状図
- 第9図 第1号住居址平面図及び断面図
- 第10図 第1号住居址出土遺物拓影
- 第11図 第2号住居址平面図及び断面図
- 第12図 第2号住居址出土遺物実測図
- 第13図 第2号住居址出土遺物拓影
- 第14図 第3号住居址平面図及び断面図
- 第15図 第3号住居址出土遺物実測図
- 第16図 第3号住居址出土遺物拓影
- 第17図 第4号住居址平面図及び断面図
- 第18図 第4号住居址出土遺物実測図
- 第19図 第4号住居址出土遺物拓影
- 第20図 第5号住居址平面図及び断面図
- 第21図 第5号住居址出土遺物拓影
- 第22図 第6号住居址平面図及び断面図
- 第23図 第6号住居址出土遺物拓影
- 第24図 第7号住居址平面図及び断面図
- 第25図 第7号住居址出土遺物実測図
- 第26図 第7号住居址出土遺物拓影
- 第27図 第8号住居址平面図及び断面図
- 第28図 第8号住居址出土遺物実測図
- 第29図 第9号住居址平面図及び断面図
- 第30図 第10号住居址平面図及び断面図

第31図	第1号炉穴平面図及び断面図	（参考）	（参考）
第32図	第1号炉出土遺物実測図	（参考）	（参考）
第33図	第2号炉平面図及び断面図	（参考）	（参考）
第34図	第3号炉穴平面図及び断面図	（参考）	（参考）
第35図	炉穴出土遺物拓影	（参考）	（参考）
第36図	遺構外出土遺物実測図	（参考）	（参考）
第37図	遺構外出土遺物拓影	（参考）	（参考）
第38図	遺構外出土遺物拓影	（参考）	（参考）
第39図	遺構外出土遺物拓影	（参考）	（参考）
第40図	石器実測図	（参考）	（参考）
第41図	石器実測図	（参考）	（参考）
第42図	石器実測図	（参考）	（参考）
第43図	石器実測図	（参考）	（参考）
第44図	石器実測図	（参考）	（参考）
第45図	石器実測図	（参考）	（参考）
第46図	石器実測図	（参考）	（参考）
第47図	石器実測図	（参考）	（参考）

写 真 図 版 目 次

- 図版 1 写真 1 遺跡の遠景
図版 2 写真 2 遺跡近景 (A 地点)
写真 3 遺跡近景 (B 地点)
写真 4 遺跡近景 (C 地点)
図版 3 写真 5 発掘風景 (A 地点)
写真 6 発掘風景 (B 地点)
写真 7 発掘風景 (C 地点)
図版 4 写真 8 第 1 号住居址
写真 9 第 1 号住居址土層断面
写真 10 第 1 号住居址出土遺物
図版 5 写真 11 第 2 号住居址
写真 12 第 2 号住居址土層断面
写真 13 第 2 号住居址出土遺物
写真 14 第 2 号住居址出土遺物
図版 6 写真 15 第 3 号住居址
写真 16 第 3 号住居址土層断面
写真 17 第 3 号住居址出土遺物
写真 18 第 3 号住居址出土遺物
写真 19 第 3 号住居址出土遺物
図版 7 写真 20 第 4 号住居址
写真 21 第 4 号住居址土層断面
写真 22 遺物出土状況
写真 23 第 4 号住居址出土遺物
写真 24 第 4 号住居址出土遺物
写真 25 第 4 号住居址出土遺物
図版 8 写真 26 第 5 号住居址土層断面
写真 27 第 5 号住居址出土遺物
図版 9 写真 28 第 6 号住居址
写真 29 第 6 号住居址土層断面
写真 30 第 6 号住居址出土遺物

- 図版10 写真31 第7号住居址
写真32 第7号住居址出土遺物
写真33 第7号住居址出土遺物
- 図版11 写真34 第8号住居址
写真35 遺物出土状況
写真36 遺物出土状況
写真37 第8号住居址出土遺物
写真38 第8号住居址出土遺物
- 図版12 写真39 第9号住居址
写真40 第10号住居址
- 図版13 写真41 第1号炉穴
写真42 第1号炉穴土層断面
写真43 第1号炉穴出土遺物
- 図版14 写真44 第2号炉穴
写真45 第3号炉穴
写真46 第3号炉穴土層断面
写真47 炉穴出土遺物
- 図版15 写真48 遺構外出土遺物
写真49 遺構外出土遺物
写真50 遺構外出土遺物
写真51 遺構外出土遺物
写真52 遺構外出土遺物
- 図版16 写真53 石器
写真54 石器
写真55 石器
写真56 石器
写真57 石器
写真58 石器
写真59 石器
写真60 石器
- 写真61 調査終了後の写真

第1章 調査に至る経過

大袋II遺跡が館林市東部第三土地区画整理事業区域内に含まれていることから、館林市教育委員会では、遺跡の保存について、群馬県教育委員会文化財保護課、市区画整理課、市都市計

画課、館林市東部第三土地区画整理事業組合準備委員会等、関係者と協議してきた。

館林市土地区画整理事業を、その事業計画書により詳しく述べてみると、事業目的に次のことがあげられている。

「本地区は、畑作を主体とする農耕地帯であるが、北側は県立つづじヶ丘公園、西側はつづじ町住宅団地に隣接し、下町西線及び公園通り線の都市計画道路整備を包含した地域であり、住宅地としての利用価値は高く、近年、個人住宅の建設が目立ち、急速な市街化が予想される地域である。

このため、早急に本事業を施行することにより、公共施設の整備改善をおこない、土地利用の合理的な増進を図り、ここに健全な市街地を造成することを目的とする。」とあり、近年増加の一途をたどる個人住宅



第1図 大袋II遺跡現況図

の建設に対処する必要上、地理的諸条件を加味したうえでの事業計画であることが解る。

さらに、この地区を取り巻く環境について述べると、館林の中心市街地の東部に位置し、東武鉄道伊勢崎線館林駅の東方約2kmの地点にある。

東武伊勢崎線による、浅草・館林間は急行で約1時間あまりと、首都圏への通勤範囲内に含まれ、その数も年々増加の傾向にあり、前述の個人住宅の建設もこうした結果に基づくもので、市街地周辺において必ず見られる現象のひとつでもある。

市教育委員会では、これ等諸々の要因をふまえ検討を加えた結果、事前に記録保存の処置を取ることとし発掘調査を実施することとした。

以下の経過を簡単に記してみたい。

昭和55年3月

- 館林市東部第三土地区画整理事業計画総観がはじまる。市区画整理課と工事設計図書とともに埋蔵文化財包蔵地「大袋Ⅱ遺跡」の取り扱いについて協議

昭和55年4月

- 市企画課、市区画整理課、市都市計画課および教育委員会において調整会議を開催。区画整理施行区域と「大袋Ⅱ遺跡」の取り扱いについて協議
- 工事概要により遺跡の現状保存が不能であるため、発掘調査のうえ記録保存の方向で検討をはじめる。

昭和55年5月

- 県教育委員会文化財保護課の指導により工事区域内の全面踏査を実施する。区域内に遺物の散布が三地点に認められる。A、B、Cの三地点とし次のとおり仮説した。

A地点 — 区域内北部 — 繩文時代前期から中期にかけての集落跡

B地点 — 区域内南東部 — "

C地点 — 区域内南西部 — 奈良時代から平安時代にかけての集落跡

- 市区画整理課、準備委員会と工事区域及び工法について再度協議。谷地および比較的掘削の少ない地帯を除き調査区を設定する。

昭和55年6月

- 調査方法について市区画整理課、準備委員会と協議する。
- 調査方法は、確認調査を実施することとし、確認調査のうえ、遺構、遺物が検出された場合は本調査を付加することとする。
- 確認調査は、 $20m \times 1m$ のトレチ方式とする。（後日 $20m \times 2m$ に訂正）

昭和55年7月

- 工事区域および調査方法について市区画整理課、準備委員会と最終協議、調査開始時期

について検討はじめる。

昭和55年8月

- 調査方法、調査時期について市区画整理課、準備委員会と最終協議。
- 調査時期について準備会にて結論出す。

昭和55年9月

- 調査方法、調査時期について地権者に通知。
- 調査開始時を昭和55年11月1日とする。調査はA地点よりB、C地点の順で実施する。
- 地権者より調査方法、調査時期についての説明要請を受ける。

昭和55年10月

- 地権者を集め現地説明会を実施する。説明会において、耕作中の作物の取り扱いについて意見があり、収穫時まで配慮することとして調査方法、調査時期に合意。

昭和55年11月

- 大袋II遺跡発掘調査開始。A地点より確認調査にはいる。

このように、今回の発掘調査は本市教育委員会が組織的に行うはじめてのケースでもあり、関係諸課、地権者等においても種々のとまどいが見られた。しかし、調査過程における遺物や遺構の検出は、そうしたとまどいを越え、地権者を、関係者を沸かせ、新しい歴史解明の方法に対し心良く賛同していただけたと思う。

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

館林市は、群馬県の東端に位置する市である。群馬県の形を翼を広げた鶴にたとえるならば、くちばしにあたる部分である。

又、本市は、関東地方のほぼ中央に位置する市でもある。

北を渡良瀬川、南を利根川に挟まれた邑楽、館林地方は、関東構造盆地のはば中心地でもあり、その標高は低く、別名、群馬の水郷地帯とも呼ばれている。

しかしながら、一見平坦に見えるこの地域にも、多くの起伏があり、高台には古くから、先人達が住みついた。

館林付近の地形を概観すると、比高5m前後の低台地と、利根・渡良瀬川の氾濫原である低湿地とから成ることが観察される。低湿地には、城沼、多々良沼をはじめとする多くの沼が存在する。

低台地は、邑楽郡大泉町から、東方へ同郡板倉町までのびる洪積台地で、利根・渡良瀬両河川によって運ばれた礫、砂、粘土の上に、厚さ5m前後の中部・上部ローム層が堆積したものである。

標高は、東端大泉町付近で30m、西端板倉町付近で15mを測り、台地は西から東へむかって緩傾斜している。館林市においては、標高20mの等高線が、市のはば中央を縦断している。

これは、台地の北辺と南辺において、台地から低湿地へ移行する線とよく一致する。

洪積台地の西端は、高根砂丘、成島砂丘、鞍掛山脈などと呼ばれる標高30mをこえる馬背状の高台によって区画されている。この高台は、古利根川によって形成された内陸古砂丘で、この西侧が、かつての利根川の流路であるといわれている。この高台では、旧石器の時代から多くの遺跡が確認されている。

又、多々良沼は、古利根川の残り沼であるということができる。

洪積台地の南側には、利根川による後背湿地、谷底平野が存在する。

台地の南辺下を、利根川に平行して谷田川が流れ、この谷頭は、洪積台地を深く浸食し、多くの舌状台地と、湖沼を形成している。近藤沼、茂林寺沼、蛇沼は、この谷頭に形成された湖沼である。

本市の遺跡の大半は、これらの湖沼を望む舌状台地上に多く確認されている。

洪積台地の北側には、渡良瀬川による後背湿地、谷底平野が広がっている。

この底地帯の中に、いくつかの旧河道を確認することができ、これが、かつての渡良瀬川で

あると思われる。しかしながら、実際には、この底地帯の内をいく度も流跡をかえ、流れていったものと想像される。

又、現状では、渡良瀬川は、かなり山地側に寄って流れており、ここに何らかの地形の変化を想像させるものの、明確な根拠はない。

台地の北辺を浸食する開析谷は少ないが、鶴生田川は、北辺を開析する大きな谷である。この川の谷頭は、館林の町のはば中央を横断し、館林駅から谷越を通り、成島南方の大谷付近まで追求することができる。

城沼は、この谷の水を集めて形成された湖沼である。台地の北辺にそっても又、いくつかの遺跡を確認することができる。

大袋II遺跡は、東武伊勢崎線、館林駅の東方約2kmの地点に位置している。地籍は、群馬県館林市大字羽附字大袋3080-1、3080-2、3080-3、3082-1、3082-2、3082-3、3083-2、3084、3085、3086-8、2549-3、2549-27、及び館林市松原二丁目、262-4、263-3、264-1、264-2、264-5、277-1、277-2番地である。

遺跡は、鶴生田川によって開析された、洪積台地北辺の少ない舌状台地の西斜面に所在する。遺跡のある舌状台地の、西及び北側は、鶴生田川の開析沼である城沼が、東側は、古城沼と呼ばれる低湿原があり、台地は、ちょうど三ヶ月状に、城沼にむかって突出する形を呈する。

この舌状台地の規模は、長さ約1.5km、幅0.5kmと、北辺に位置する舌状台地では、規模が大きい。又、比高は、湿地面より約5mを計るが、やはり東へ向って緩傾斜している。

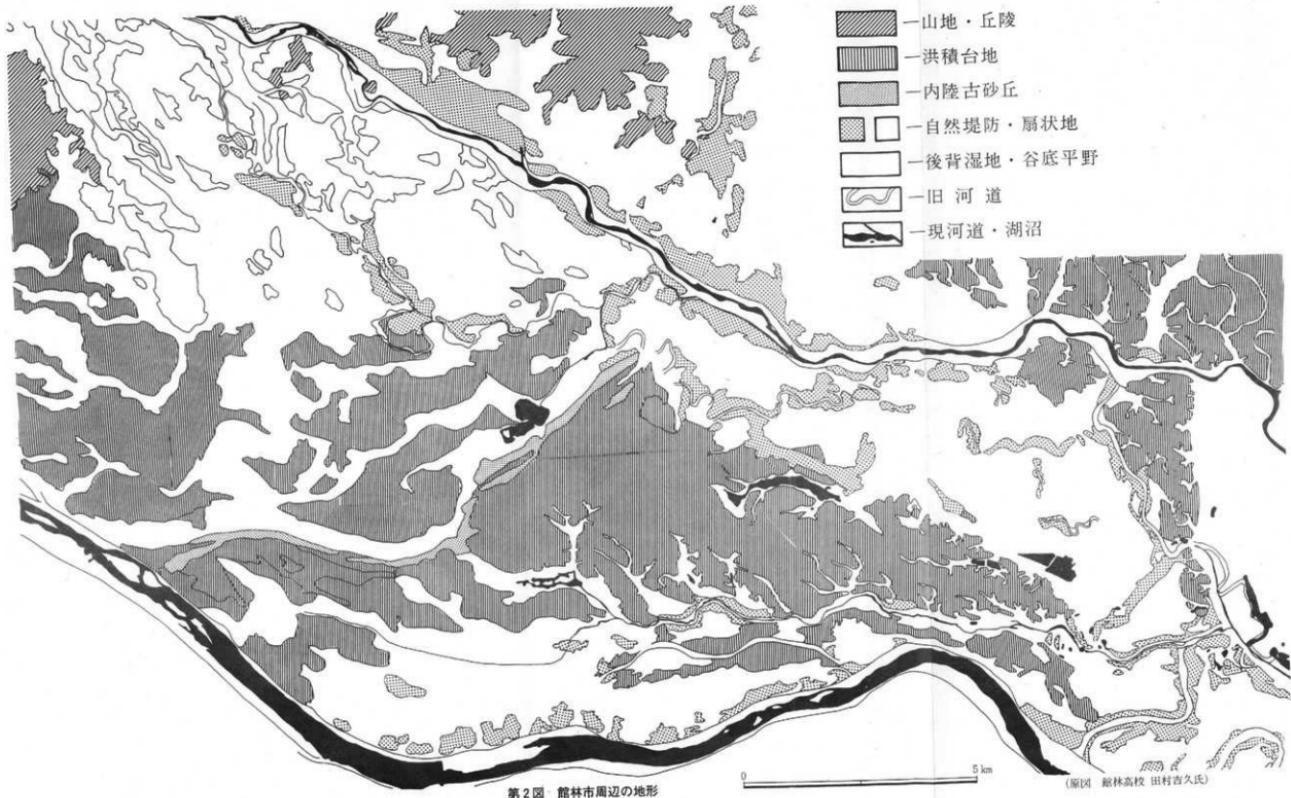
第2節 遺跡の歴史的環境

「ヒト」が住む—これは、その土地の地勢、気候等自然条件に左右される。それを立証するかのように先人達の足跡は大地に刻まれている。

館林市における遺跡の発掘調査例は少なく、歴史を実証するには不充分である。しかし『群馬県遺跡台帳』作製に伴う分布調査の結果や、飯塚多右衛門氏収集資料の分類などから、「ヒト」の動きを推察することが可能になる。

本市における遺跡の分布および遺物の散布状態を見ると、前述した洪積台地の縁辺部にその集中度が高く、洪積台地と低湿地帯の境は、標高20mの等高線と一致する部分が多い。

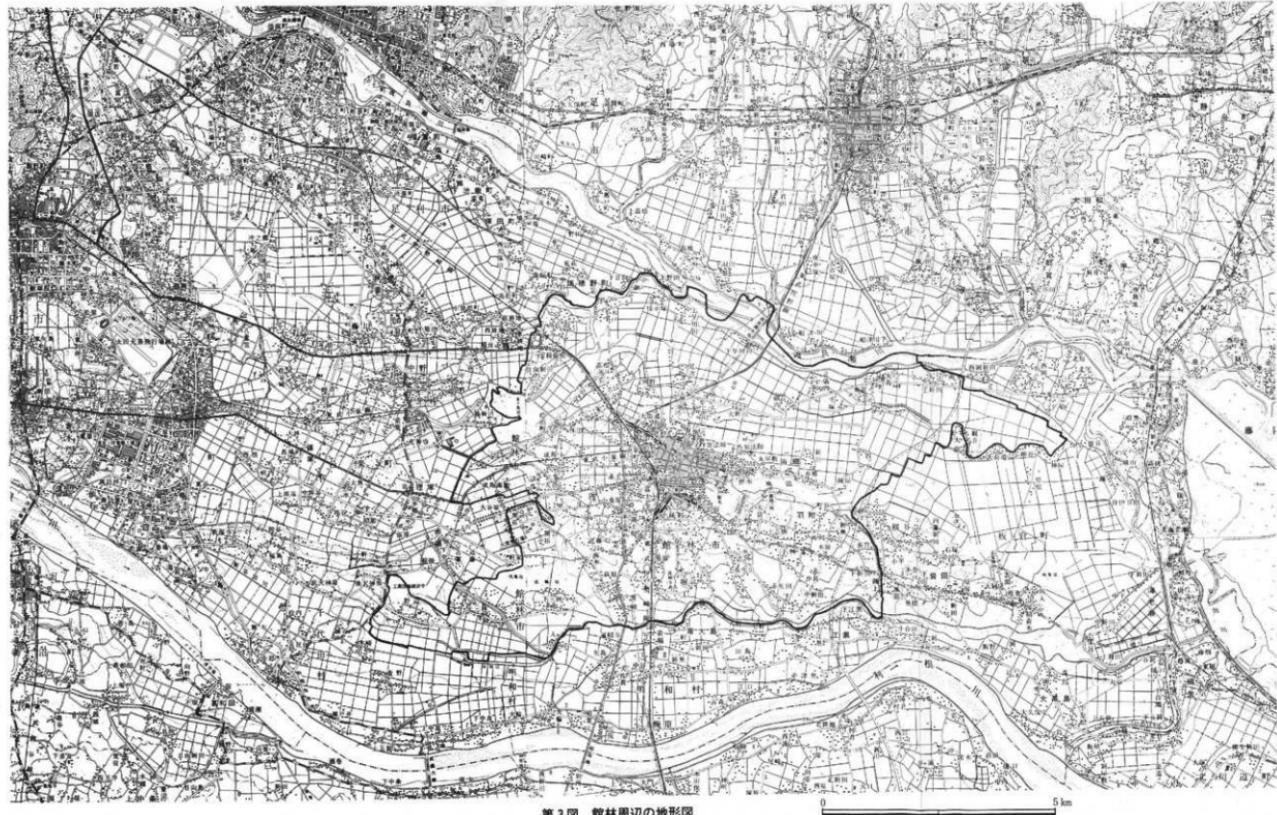
「ヒト」の動きが顕著に表われる繩文時代。群馬県内では、近年の大規模発掘調査等により、繩文時代の研究もさかんに行われている。しかし、東毛地方における繩文時代の様相は、ほとんど実態がつかめていない。本市の台帳登載遺跡のうち半数以上が繩文時代である。遺跡によ



第2図 館林市周辺の地形

0 5 km

(原図 館林高校 田村吉久氏)



第3図 館林周辺の地形図

り時間差はあるものの、その内容はほぼ全時期にわたっていることは、居住条件が自然環境からみて、普遍的に良好であったといえよう。

本遺跡周辺の遺跡の分布状況により、洪積台地上にまとまりを分類すると、城沼周辺、洪積台地南縁（茂林寺沼、蛇沼周辺）、洪積台地北縁に分けられる。以下その分布状況に基づき時間的なまとまりを表に示した。（表1、表2）

縄文時代時期別遺跡件数（表1）

	早　朝	前　期	中　期	後　期	晩　期
遺 跡 件 数	(6)	(7)	(5)	(5)	(5) (5)
地形分類	城沼沿岸 洪積台地北縁	城沼沿岸 洪積台地南縁	城沼沿岸 洪積台地北縁	城沼沿岸 洪積台地北縁	城沼沿岸 洪積台地南縁 (1) (0)
	(0) (0)	(2)	(3)	(3)	

縄文時代各遺跡の時間的推移は図表のとおりである。これによれば、縄文時代早期の資料を散布する遺跡は、城沼南岸に1つのグループがみられる。いずれも城沼に突出した樹枝状台地の北端に位置する。これらの遺跡は縄文時代においてその後も継続的に集落を営んでいたものと思われる。

縄文時代前期～後期になると、遺跡は洪積台地縁辺部に大きな広がりをみせる。早期の遺跡群と城沼をはさんで対峙する北岸。洪積台地南縁の茂林寺沼周辺と蛇沼周辺。特に南縁では、遺跡として台帳に登載されてはいないが、飯塚多右衛門氏収集資料から、なおこの地方に前期から後期にかけての集落の形成が広い範囲で行われていたとみられる。洪積台地北縁では、特に中期から後期の遺跡が圧倒的に多い。

ほぼ市内の中心部に限り、縄文時代の遺跡の分布状況をみたが、遺跡数が多いにもかかわらず、晩期の様相を示す資料数は減り、以後弥生時代にかけて遺跡数は激減する。

ここに、縄文時代を通してみると、2つの大きな節目があったことが推測される。1つは早期から前期にかけて。1つは後期から晩期にかけてである。「ヒト」の移動は、自然環境

縄文時代の遺跡群の時間的推移(表2)

地形上の区分	遺跡名(№)	縄文時代				
		早期	前期	中期	後期	晩期
城 沼 沿 岸	大袋I遺跡⑦					
	大袋II遺跡					
	花山東遺跡⑨					---
	下志柄遺跡⑩				---	---
	屋敷添遺跡⑪					
	三軒屋遺跡⑫					
北 岸	普長寺付近遺跡⑬					
	当郷遺跡⑭					
洪 積 台 地	下堀工道溝遺跡⑮					
	茂林寺沼周辺					
	笹原遺跡⑯					
南 岸	腰巻遺跡⑰					
	間堀遺跡⑱					
	大原道東遺跡⑲					
その他	道溝遺跡⑳	---	---	---	---	---
洪 積 台 地 北 縁	朝日町遺跡⑳					
	加法師遺跡㉑					
	外加法師遺跡㉒					
	大街道遺跡㉓					
	岡遺跡㉔					
	岡野遺跡㉕					

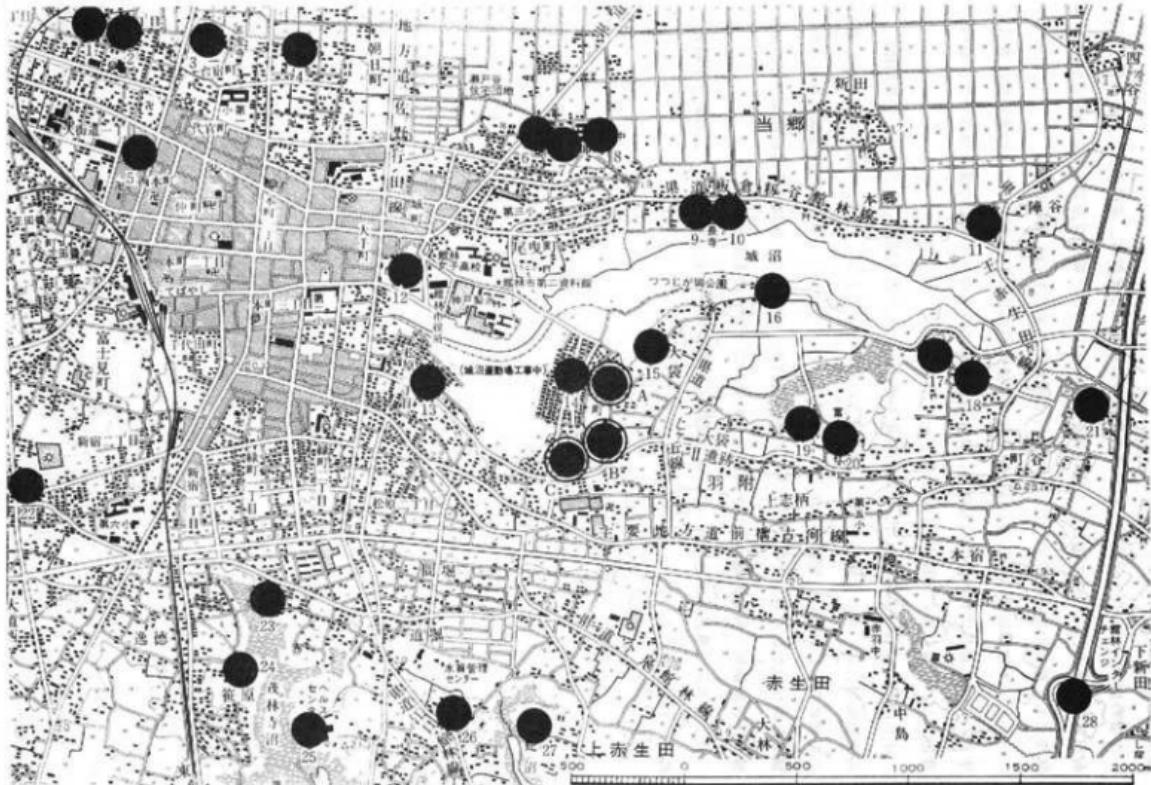
—— 県台帳登載による時期

----- 飯塚多右衛門氏収集資料による時期

あるいは生活環境の変化を如実に物語るといえよう。

弥生時代の遺跡は、現在市内で確認されているのは道溝遺跡のみである。道溝遺跡は昭和45年東北自動車道建設に伴う緊急発掘調査が県教育委員会で行われており、縄文時代～平安時代の複合遺跡であることが判明している。弥生時代の遺構として、後期の住居址一軒、方形周溝墓等も確認され、本市における弥生時代の生活様式の一端をしのばせる。本市全体における弥生時代の資料は乏しく一例により推測することはできないが、以前は台地上のみ生活空間が与えられなかつたものが、稻作の普及により低地に面した微高地にも集落が営まれていた可能性もある。しかし、河川の氾濫原にあたる低地では流水していることも考えられる。

古墳時代に入っても遺跡数の増加はみられない。墳墓は、町谷古墳①、富士山古墳②、山王山古墳③、愛宕神社古墳④、富士嶽神社古墳⑤、が確認されている。市内全域をみても6件にとどまり、県内古墳の台帳登載件数1,582件に比べ極めて数が少ない。これらの古墳は、洪



第4図 周辺の遺跡

積台地上に形成されている。

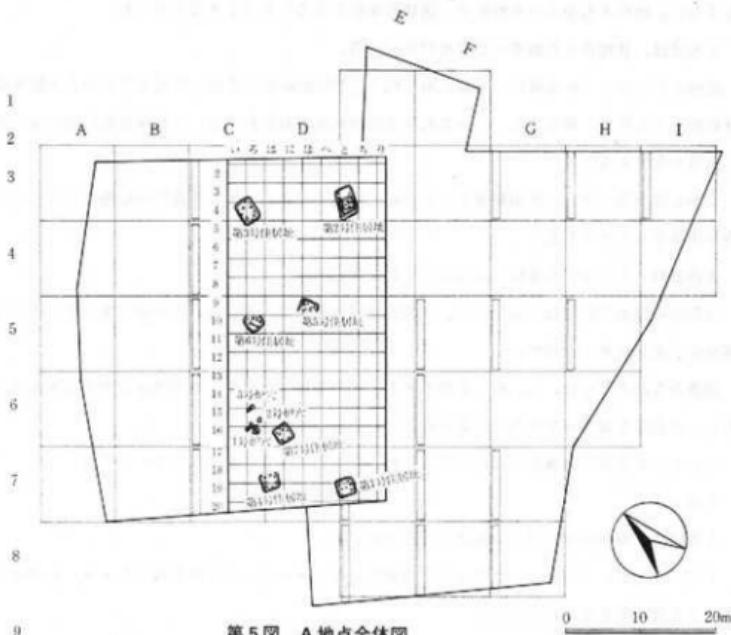
古墳時代および奈良・平安時代にかけて集落の様相を知る遺跡は、道溝遺跡、当郷遺跡、三軒屋遺跡である。これらの遺跡は、残存状態が良好でないが、城沼周辺でも他に善長寺付近遺跡等にも土師器の散布が認められ、この種の遺跡も増大するものと思われる。

しかし、本遺跡周辺に限るならば、縄文時代の遺跡数に比べ、弥生時代以降の遺跡数は激減する。それは自然的要因によるものか、社会的要因によるものかは推定の域を出ないが、城沼周辺における遺跡群の特質ともいえよう。

中世以降は城館址の変遷から、土地の選定をめぐって人々の意図がくみとれる。白旗城跡²⁰、大袋城跡²¹、はいずれも城沼を背にした「城」の原形といえよう。しかし「城」として最も適した地に作られたのは、館林城であろう。文献によれば天文元年（1532）の築城とされるが、城の形態は典型的な平城であり、現在三の丸土橋門周辺の土壘²²、前期城下町總曲輪の土壘・城塹²³、後期城下町總曲輪の土壘・城濠²⁴がわずかに当時の姿をとどめる。

以上が大袋Ⅱ遺跡の周辺にみられる遺跡である。自然の中で生活する「ヒト」の動きが顕著にみられるといえよう。

第三章 調査の経過



第5図 A地点全体図

大袋II遺跡の調査の方法と経過を順をおって述べることとする。

昭和55年5月の現地踏査において、東部第三区画整理事業区域内には、3ヶ所の遺物散布が確認されるに至った。調査は、この遺物散布の三地点を中心に行うこととし、この三地点を、仮りに、A、B、C地点とすることとした。

A地点は、大袋II遺跡として、県台帳No1103、市台帳No12に登載された地点である。

本発掘調査の主体をなした地点でもあり、比較的、大きな、平坦な台地上である。

表探資料も、縄文時代前期黒浜式土器を中心に、早朝の条痕文系の土器、前期詰磧式土器、中期加曾利E式土器と、種類、内容、量ともに多く、地形上からも、この時期の集落の存在が予想される場所であった。

B地点は、A地点の南側にあり、A地点と同じ台地上にある。

A地点からやや傾斜して低くなくなった所で、B地点の南端は、さらに低くなる。傾斜は、南に向って低くなる様相を見せ、A地点にくらべると、1m前後低い。B地点内できえ、北端と

南端では50cm程の差がみられる。

表探資料としては、縄文時代中期加曾利E式の土器片が散布していたが、範囲は小さく、数も少ない。地形ともからみあわせて、遺構の存在があるかどうか不安であった。

C地点は、B地点と谷地をへだてた対岸に在る。

遺跡としては、三軒屋遺跡（県台帳No.1125、市台帳No.34）と同一台地上であり、大袋II遺跡に加えるよりも、現状では、つつじ町住宅団地に生まれかわった、三軒屋遺跡の範囲に入れるべきであろう。

しかしながら、今回、区画整理が、この地に及ぶことから、大袋II遺跡のC地点として、調査を実施することとした。

表探資料としては、平安時代国分式の土器片が見られた。

地形的には東斜面ではあるものの、比較的良好的な地形であるため、同時期の集落としての可能性が、大いに考えられた。

調査の方法としては、A、B、C地点とも、地形に即した形で、1辺20mのグリットを設定し、その西壁を幅1mで南北に試掘する方法を予定していた。

しかし、A地点の調査が、進行するにつれ、その方法を変更せざるを得なかった。

A地点

A地点は、昭和55年11月より確認調査を開始した。

上記の方法で、1辺20mのグリットを西東に9列（A～I）北南に9列（1～9）の計54グリットを設定することができた。

このグリットの西壁を幅1mで、トレンチを入れたもの、幅1mでは、不明な点が多く、調査途中で、幅2mにあらためた。

こうして試掘していく中で、遺物の存在は確認できるものの、遺構として明確に確認されるものはなかった。

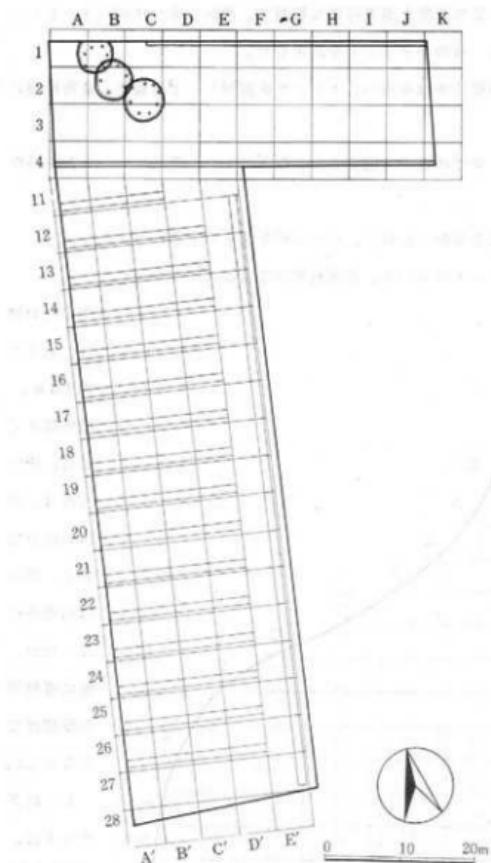
このような結果から、本調査部分を、遺物の集中地点であるDトレンチ、Eトレンチを中心とし、Cラインの東側10m、Dライン、Eラインの西10mの40m×90mと決定した。

本調査については、昭和56年度に実施した次第である。

確認調査において、明確な結果があったわけではなかったので、本調査部分を、1辺5mの小グリットに分け、その西壁をさらに、重横を使用し、トレンチを掘り、遺物の存在と、断面観察によって、遺構を確認する方法をとった。

本調査部分の小グリットは、西から東へ9列（い～り）北から南へ20列（1～20）の計180グリット設定することができた。

このような方法で、遺構確認につとめ、住居址7軒、ファイヤーピット（炉穴）3基を確認



第6図 B地点全体図

したものである。

B 地点

B 地点は、都市計画道路、下町西線が通過する地点であるため、道路部分は、全面の調査、遺物の散布部分は、A 地点の方法をふまえた、トレンチにより確認調査を実施することとした。

B 地点の調査は昭和56年4月より開始した。

本地点は、調査区がカギの手状になることから、小グリットの配置は、1辺4mで西から東へ11列（A～K）、北から南へ4列（1～4）、方位を変更して、北から南へ18列（11～28）西から東へ5列（A'～E'）とすることとした。

(A～K-1～4) グリットにおいては、道路通過予定地であることから、全面の調査を、(A'～E'-11～28) のグリットにおいては、小グリットの南辺を重機を使用し、トレンチによる調査を実施した。

この結果、道路通過予定地において、縄文時代中期の住居址を確認することができた。

B 地点は、前述のごとく、A 地点より低く下がってくる地形であるため、南側部分では、遺構の確認はなかった。

(A、B、C-1、2、3) グリットにおいて確認された住居址は、本台地上で、南端の部分に位置するものであろう。

C 地点

C 地点の調査は、昭和56年4月より開始した。

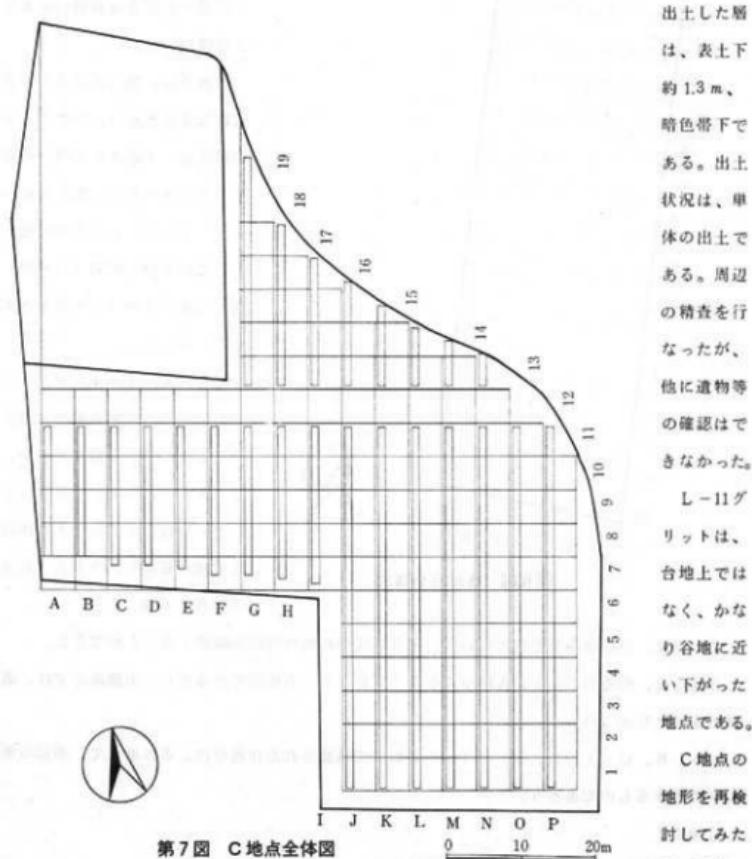
C地点は一部宅地を含むため、宅地を除き調査可能な範囲で、西から東へ16列（A～P）、南から北へ19列（1～19）と1辺 mの小グリットを設定した。

調査の方法は、各グリットの西壁を重機を用い、トレンチを掘削し、土層観察、遺物検出による確認調査を実施した。

この結果、本地点においては、すでに表土（褐色土）の存在はなく、現状でローム面を耕作している状態が観察された。

本地点では、造構等の確認ができなかったので、ローム層を深掘りすることとした。

この深掘りによって、L-11グリットにおいて、黒曜石製の尖頭器の出土をみた。



第7図 C地点全体図

は、つつじ町団地の存在で、地形確認することはむづかしくなってはいるものの、つつじ町団地（三軒屋遺跡）の存在する舌状台地の谷地に面する基部にあたっている。

このような判断の結果、C 地点は、遺跡としての可能性はうすいと考えられ、三軒屋遺跡は本地点までの広がりはなさそうである。



図 3-2-2 三軒屋遺跡付近の地形

（左）地形図（右）三軒屋遺跡付近の地形

左の地形図では、山の斜面を示す斜面と、その下の谷底を示す谷底の位置が示してある。

右の図では、斜面と谷底の位置が示してある。斜面の上部には「斜面」、斜面の下部には「谷底」と記されている。

この図は、三軒屋遺跡付近の地形を示すものである。

図 3-2-3 三軒屋遺跡付近の地形

左の地形図では、山の斜面を示す斜面と、その下の谷底を示す谷底の位置が示してある。

右の図では、斜面と谷底の位置が示してある。斜面の上部には「斜面」、斜面の下部には「谷底」と記されている。

この図は、三軒屋遺跡付近の地形を示すものである。

左の地形図では、山の斜面を示す斜面と、その下の谷底を示す谷底の位置が示してある。

右の図では、斜面と谷底の位置が示してある。斜面の上部には「斜面」、斜面の下部には「谷底」と記されている。

この図は、三軒屋遺跡付近の地形を示すものである。

左の地形図では、山の斜面を示す斜面と、その下の谷底を示す谷底の位置が示してある。

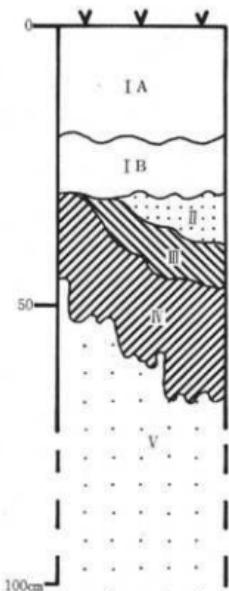
右の図では、斜面と谷底の位置が示してある。斜面の上部には「斜面」、斜面の下部には「谷底」と記されている。

この図は、三軒屋遺跡付近の地形を示すものである。

左の地形図では、山の斜面を示す斜面と、その下の谷底を示す谷底の位置が示してある。

右の図では、斜面と谷底の位置が示してある。斜面の上部には「斜面」、斜面の下部には「谷底」と記されている。

第4章 基本層序



第8図 土層柱状図

館林の洪積台地は、遺跡の環境のところで述べたごとく、利根・渡良瀬両河川によって運ばれた堆積物（礫、砂、粘土、シルト）の上にローム層が積もって造られたものである。

このローム層は、上部ローム、中部ロームであり、ボーリング探査によれば、その厚さは、約5m程度である。

本遺跡においても、表土下にローム層が確認された。

館林地方は、土の配給源である火山から遠い地であるためか、特有のからく風によって、土が運ばれてしまうためか、台地上では、表面からローム層までの深さがひじょうに浅い。

深いところで40cmも掘れば、ローム層に達してしまうのが現状である。

又本遺跡においては、この上、耕地整理や陸田化のために、土が動かされており、表土は、最も深いところでも30cmをこえることはなかった。

第8図は、本遺跡中最も残りのよいA地点I-3グリットにおける土層断面を参考に、本遺跡の基本土層を模式化したものである。C地点におけるトレンチ調査において、ローム層を深掘りする結果となったが、この際、

ハードロームの上面より約80cmのところにおいて、一枚の暗色帯を確認することができた。

前述のごとく、本遺跡においては、耕地整理等の土木工事によって、表土の削除や、移動が行なわれており、これは、台地が東へ傾斜斜をもつためでもあろうか、遺跡の東側に比して、西側部分の表土は薄い。A地点のB、C、Dラインのグリットにおいては、表面下10cm程度で、ローム層に達し、Bラインでは、漸位層さえ確認できなかった。又、I-3グリットは、遺跡内では、最も東に位置するグリットであるが、それでも、表土下に一層のみ確認できたにすぎなかった。

次に土層の説明を加えることとする。

第I A層 棕褐色土、陸田面で耕作土である。粘性、しまりがなく粒子が荒い。さらさらしていて1mm程の軽石を含む。

第ⅠB層 棕色土、陸田の床面である。非常にしまっていてかたい。質的にはⅠA層と変わらない。

第Ⅱ層 暗褐色土、粘性、しまり有り、黒味をおび、緻密で下方へ行くと黄味をおびる。

第Ⅲ層 晴黄褐色土、いわゆる漸位層である。

第Ⅳ層 黄褐色土、ロームのソフト部分である。

第Ⅴ層 黄褐色土、ロームのハード部分である。この下約80cmに一枚の暗色帯が確認できる。

以上本遺跡の土層について述べてきたが、B地点の土層も、これと変わりなく、C地点においては、暗色帯は確認できたものの、すでにローム層を耕作しているものであった。

確認調査から、本書刊行までの間、上層について、様々な検討を行ってはみたものの、

本市において調査された遺跡においては、そのどれもが、表土が薄く、確実な資料とすることはできなかった。

本遺跡における绳文時代早期及び前期の遺構は、覆土の色調が、明確でなかったため、ハードロームまでトレンチを掘って断面による確認をせざるを得なかった。その結果、いずれも、IV層を切り込んで構築されてはいたものの、明確にⅢ層を切り込んで構築されたと確認できたのは第5号住における一例である。

出土遺物も、Ⅲ層からIV層にかけて多く、ここに、生活面を想定することができよう。

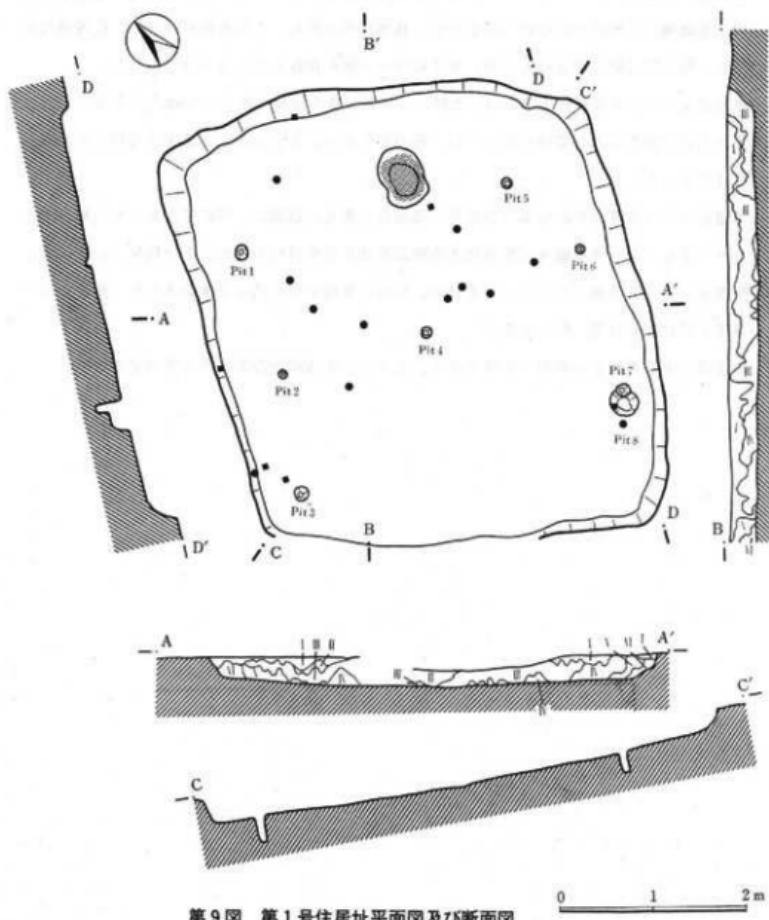


図版3-15 佐賀市立歴史博物館蔵「第5号住」

第5章 遺構と遺物

第1節 第1号住居址

第1号住居址は、A地点、本調査部分の最南端、(へ・と-18・19)グリッドに位置する。南辺の一部が畔により調査できなかったが、住居址のほぼ全様を調査することができた。



第9図 第1号住居址平面図及び断面図

確認面はローム層である。

その規模及び平面形は、長軸 520cm、短軸 465cm を計るやや平行四辺形状の不整長方形を呈する。主軸は、N - 25° - E である。

壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、壁高は30cm 程である。壁溝は、みとめられなかった。

床は、ロームであるが、踏みかためられてはいない。

柱穴は、8本確認することができた。いずれも規模は小さく、南東コーナーの Pit 8 をのぞいて、径が10~20cm、深さは30~35cm である。Pit 8 は、径30cm、深さ15cm である。

配列は、Pit 1・2・3 が西壁にそって、Pit 5・6・7・8 が東壁にそって在る。

又 Pit 4 は、住居址のはば中央に位置する。

炉は、住居址のかなり北にかたよった位置に在る。その規模及び平面形は、65×45cm の墳円形である。深さは 5cm 程で焼土は、層をなさなかったが、全体的に粒子を確認できる。

確認調査時において確認された炉は、本住居址の炉であった。この時点においては、土器が埋けられていたが、本調査に至るまでの間に、ひきぬかれ荒らされており、本調査で、炉の状況を明確にできなかった、残念である。

覆土は、6層に分けられる。

第Ⅰ層：茶褐色土（粘性なし、しまりなし）

第Ⅱ層：褐色土（粘性やや有り、しまり有り）

第Ⅲ層：褐色土（粘性やや有り、しまりやや有り、粘土ブロックを含む）

第Ⅳ層：褐色土（粘性なし、しまりやや有り）

第Ⅴ層：明褐色土（粘性やや有り、しまりなし）

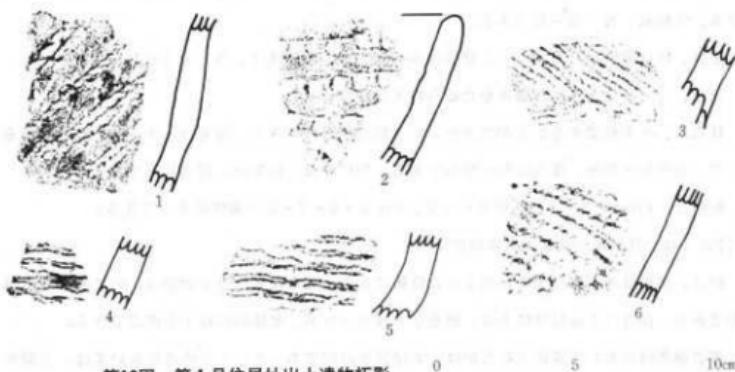
第VI層：明褐色土（粘性なし、しまりなし）

堆積状態は自然流入を示す。

遺物の出土量は多くない。分布状況は、ほぼ中央に散布する状況を示す。

本住居址の時期はその出土遺物より縄文時代前期黒浜期と思われる。

第1号 住居址出土遺物



第10図 第1号住居址出土遺物拓影

0 5 10cm

本住居址の出土遺物の数は少ない。前述のごとく、炉には土器が埋けられていたはずであるが、ひきぬかれたためその詳細はわからない。

ここでは、そのうち6片を採択した。

2は口縁部破片、その他は、胴部の破片である。

1・3は、2本の縄を棒状の工具にまきつけ、ころがすという施文方法をとる。

1は、L (フ) の縄、3は、R (ル) の縄である。

2は、口縁部の破片で、半截竹管による押し引き様の文様を横にはしらす。

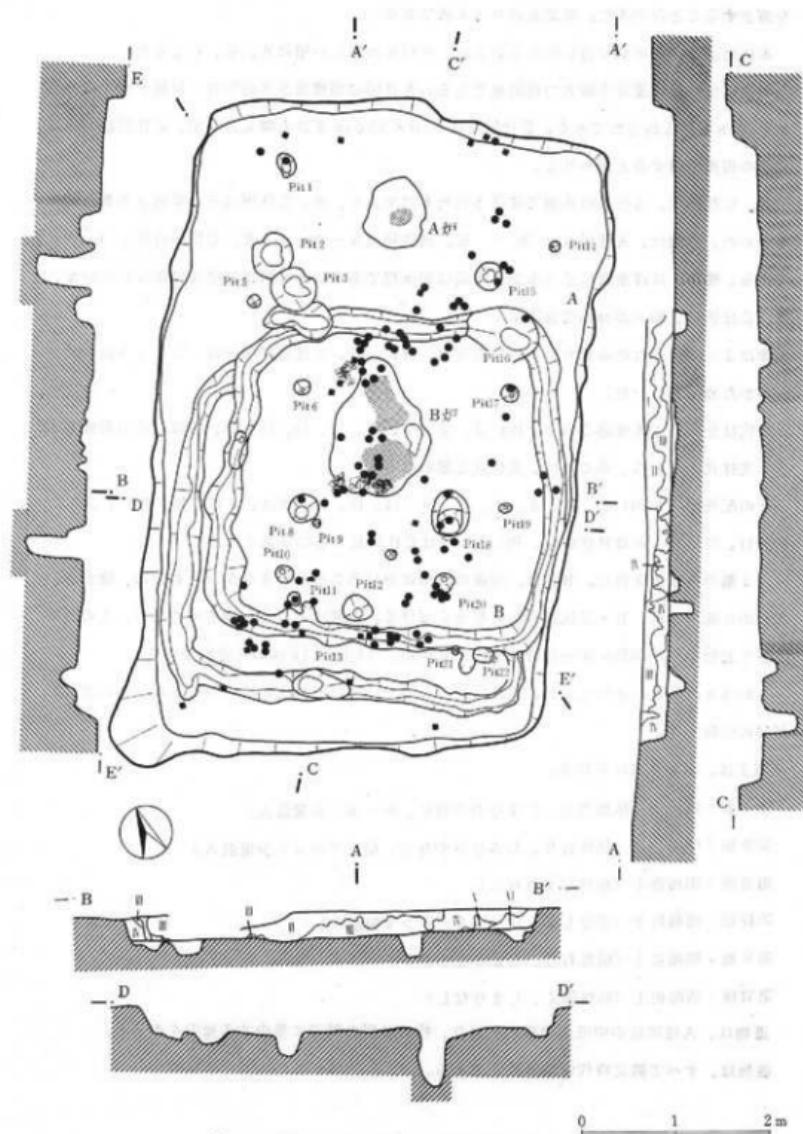
4・5には、竹管による、波状の沈線文がみられる。

6は、L (フ) の単筋斜縄文である。

これらの破片は、そのいずれも、胎土に繊維を多量にふくみ、断面は、サンドイッチ状になっている。又、1・3には、砂が、ふくまれる。

焼成は良好で、特に、2、4、5、6の内面は、きれいになでられている。

第2節 第2号住居址



第11図 第2号住居址平面図及び断面図

第2号住居址はA地点本調査部分の最北端（へ・と-3・4）グリットに位置する。その全体を調査することができた。確認面はローム層である。

本住居址は3軒の切り合いがみとめられ、それぞれ新しい順にA、B、Cとした。

本住居址は、本遺跡中最大の住居址である。A住居の規模及び平面形は、長軸696cm、短軸450cmを計る長方形である。B住居址は350×350cmを計る隅丸の方形、C住居址もほぼ同様の規模を量すると思われる。

B、C住居は、A住居の床面で確認されたものであり、B、C住居はその平面より新旧関係を求めた。主軸は、A住居N-28°-E、B住居はN-28°-E、C住居はN-8°-Eである。壁は、ほぼ垂直に立ちあがり壁高は30cm程である。A住居には壁溝は伴なわないが、B、C住居は、30~20cm幅で全周する。

床はよくふみかためられたロームであった。特に、B、C住居の部分は、ひょうによく、ふみかためられていた。

柱穴は全部で22本確認された。Pit 2、3、4、8、12、13、15、16、18は、その規模も大きく主柱穴と思われ、のこりは、支柱穴と思われる。

その配列から、Pit 1、2、3、4、5、9、14、15、16、18は、A住居址、Pit 6、9、10、11、17、19、20はB住居址、Pit 7、22はC住居址のものであろう。

炉は2基のみ確認された。B炉は、明確に2つに分けることはできなかったものの、焼土が、2ヶ所に確認され、B・C住居の存在をうらづける。形態はどちらも地焼炉であり、その規模及び平面形はA炉が75×60cmのはばだ円、B炉が、150×110cmの不定形である。

A炉はA住居址、B炉は、B、C住居址のもので、それぞれ住居址のかなり北へかたよった部分に位置する。

覆土は、6層に分けられる。

第I層：褐色土（粘性有り、しまりやや有り、カーボン少量混入）

第II層：明褐色土（粘性有り、しまりやや有り、粘土ブロック少量混入）

第III層：明褐色土（粘性しまりなし）

第IV層：暗褐色土（粘性しまりなし、カーボン少量混入）

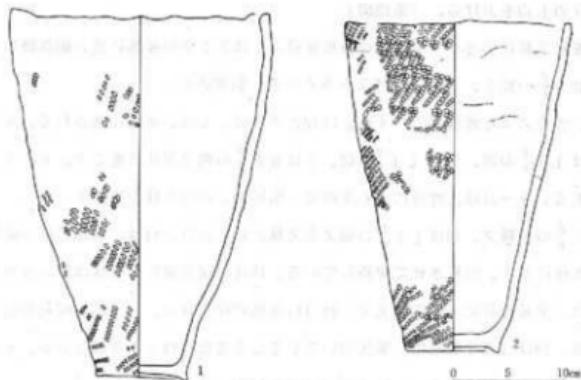
第V層：明褐色土（粘性有り、しまりなし）

第VI層：明褐色土（粘性強く、しまりなし）

遺物は、A住居址の中央に分布しており、特にB炉の周辺に集中する傾向をみせる。

遺物は、すべて縄文時代前期黒浜式である。

2号住居址出土遺物



第12図 第2号住居址出土遺物実測図

本住居址の出土遺物のうち、復元できたものは、2個体である。（第12図、1・2）

1は、深鉢型土器で、残存は、全体の約70%程度である。

口径は、24.2cm、底径 8.2cm、高さ 33.5cm、器厚 0.8cmを計る。

口縁部は、やや内湾し、最大径は、口唇部から2cm程下に有り、24cmを計測する。

色調は、褐色で、特に、胴部から口縁にかけては、火熱を受けて黒っぽくなっている。焼成は良好で、胎土には、多量の繊維を混入する。

底部は、0.5cmの上げ底となる。

文様は、うすくなってしまっており、明確ではないが、胴部はし（フ）の単節斜縞文を、底部は、L（フ）の縞を、棒状のものに巻きつけてころがしたと思われる。

内面は、ナデによって整形されている。

2は、深鉢型土器で、残存は、全体の70%程度である。

口径 20.4cm、底径 8.3cm、高さ 30.2cm、器厚は、0.7～0.8cmを計る。

底部からほぼ一直線状に口縁へと立ち上がる。口唇部は一条の溝を有する。

色調は、赤褐色で、胴部から口縁にかけては、火熱をうけ、黒っぽくなっている部分がみられる。焼成は良好で、胎土には、多量の繊維と、小砂を混入する。

底部は、0.5cm程の上げ底となる。

文様は、口縁付近、胴部の上半部、胴部下半部から底部にかけてと三つに分かれる。

口縁部付近と、胴部下半部は、L（フ）の縞をころがしたものである。

胴部上半部は、2本のL（フ）の縞で、ループ文を施す。

又、内面には、輪積痕と思われるラインが、いくつか確認できるか、明確ではない。

次に破片のものをあげる。(第13図)

1は、櫛状工具によるひっかき状の波形沈線文をほどこす口縁部に近い胴部破片である。

2は、R (ℓ) の纏文、3はループ文がみられる。胴部破片。

4、5は、竹管による波線文で、4は、口縁と平行に、5は、波状に施される。6～8は、斜纏文、6は L (r) の纏、7は L (r) の纏、8は R (ℓ) の纏で羽状に施す。6、8は、燃がゆるやかである。9～11は、竹管による沈線に、爪形や、点の文様を施す。

12には R (ℓ) の斜纏文、13は L (r) の纏文を文様としており、14は、有部付近の破片で、の繩を2本棒に巻き、回転させて押捺している。15は口縁部破片、文様ははっきりしない。

16、18は、半載竹管による爪形文で、18は口縁部破片、17は、 r を回転押捺する口縁部破片である。19は、口縁部破片。墨化がいちじるしく文様ははっきりしないが、ループ文か。

18、19は、波状口縁である。

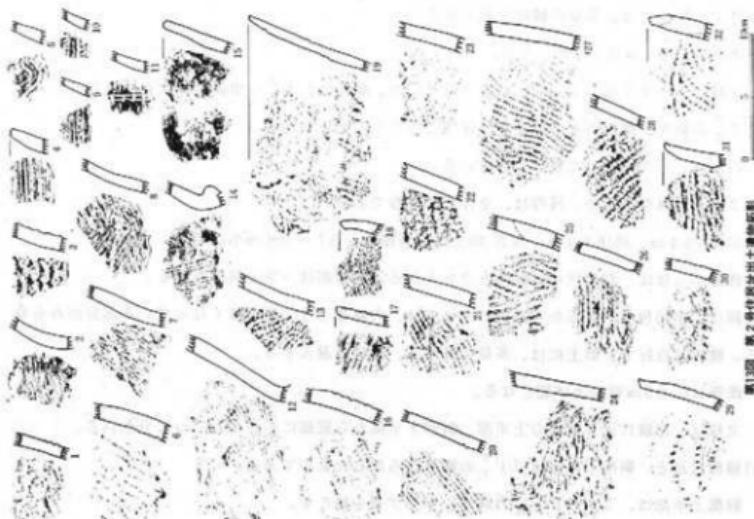
20、21は、R (ℓ) の斜纏文、22はループ文、23は、L (r) と L (r) を回転押捺し、

羽状の効果を出す。24は、R (ℓ) の纏文、25は、L (r) に r を巻きつけた多条の纏文を26～28は、それぞれ R (ℓ) 、R (ℓ) 、L (r) の斜纏文である。28は、底部に近い。

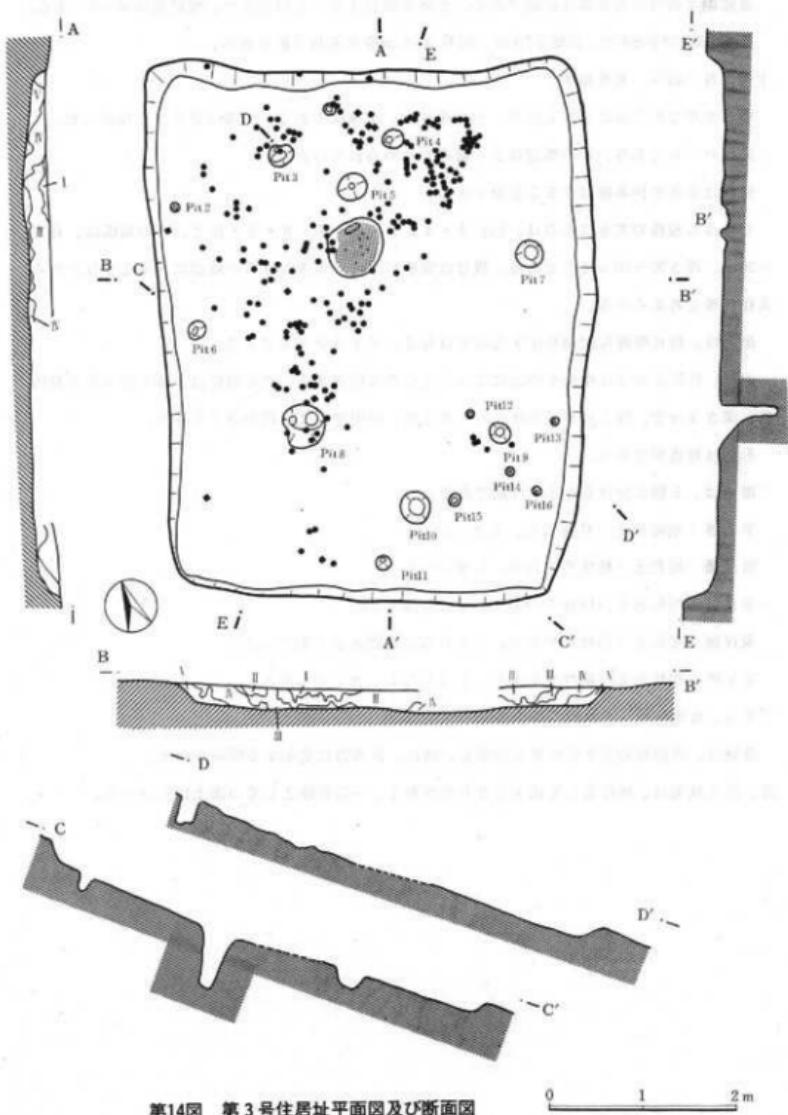
29は、波状口縁で半載竹管による爪形文を、30は、文様はない。31、32は、口縁部の破片。

31は R (r) の纏文、32は L (r) の纏文を施し、折り返したと思われる口唇部は、無文である。

そのいずれも、胎土に纖維を含む。ただ爪形の文様を持つものは、含まれる量が少ない。



第3節 第3号住居址



第14図 第3号住居址平面図及び断面図

0 1 2 m

第3号住居址は、A地点本調査部分の北部分の（い・ろ-3・4・5）グリッドに位置する。

遺跡中2番目に大きな住居址である。全体を調査することができた。確認面はロームである。

その規模及び平面形は、長軸570cm、短軸465cmを計る長方形である。

主軸はN-46°-Eを指す。

壁はややなだらかに立ち上がり、その深さは、20cm程である。壁溝は確認できなかった。

床はロームであり、炉の周辺はよく踏みかためられていた。

柱穴は全部で16本確認することができた。

このうち規模の大きなものは、Pit 3・4・5・6・7・8・9・10で、その規模は、径20~30cm、深さ30~60cmほどである。残りは規模も小さく大きな柱穴の周辺に在ることなどから、支柱穴等と考えられる。

配列は、特に明確な配列を示すものではなく、アトランダムである。

炉は、住居址のほぼ中央やや北によったところに位置する。その規模は、60×60cmの不整円形、深さ5cmで、焼土は炉の全体にみとめられ、中央では3cm程の厚さをみた。

形態は地焼炉である。

覆土は、5層に分けることが可能である。

第Ⅰ層：明褐色土（粘性なし、しまりなし）

第Ⅱ層：褐色土（粘性ややあり、しまりなし）

第Ⅲ層：明褐色土（粘性ややあり、しまりなし）

第Ⅳ層：褐色土（粘性ややあり、しまりなしⅢ層とよく似ている）

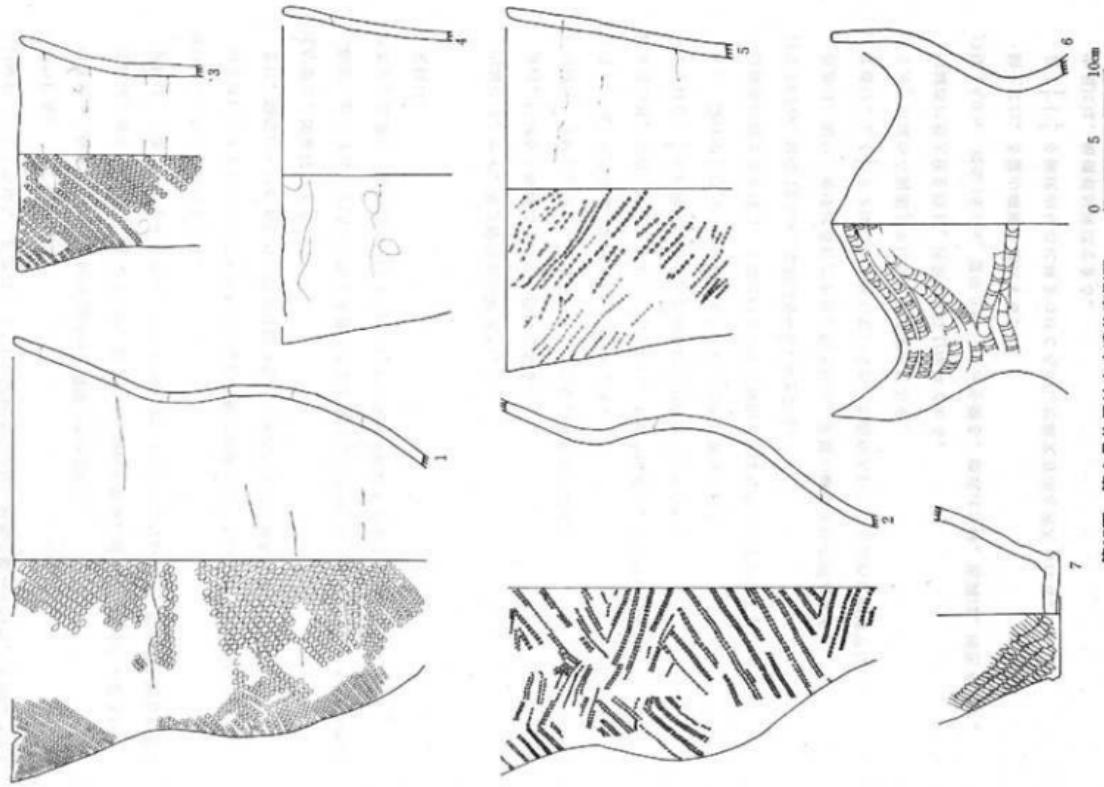
第Ⅴ層：明褐色土（粘性ややあり、しまりなし、カーボン混入）

である。堆積状態は自然流入を示す。

遺物は、住居址の北半分に多く分布し、特に、炉周辺に集中する傾向を示す。

又、出土状況は、破片として出土したものが多く、一括個体としての出土はなかった。

第3号住居址出土遺物



第15圖 第3号住居址出土遺物実測図

第3号住居址は遺物が、豊富である。実測可能な個体は、7個体あった。(第15図・1~7)

1は、底部を欠く深鉢形土器である。

口縁が、大きく外傾し、頸部は、「く」の字状にくびれ、胴部に膨みを持ち、底部につづくと思われる。

口径32cm、胴部径25.0cm、現高29.5cm、器厚0.7cmを測る。

色調は、淡褐色を示し、焼成は良好、胎土には、纖維を多量に混入し、小砂を少量含む。

文様は、全体にL(フ)を施すが、1つ1つの節がはっきりしない。又、指頭痕と思われるものがいくつかのこされている。

内面には、ナデによって整形されているが、輪積痕状のものがいくつか確認される。

2は、頸部にくびれを持ち、胴部は膨みを持つ深鉢形土器の胴部の個体である。

残存率は、20%程度である。

胴部の最大径は、24.5cmを測ると推定され、現高は、27cmである。器厚は、0.8~0.9cmである。色調は、褐色で、焼成は良好、胎土に多量の纖維と少量の少破を混入する。

文様は、

内面には、ナデ、及び輪積痕が確認される。

3は、口縁から胴部にかけての個体である。

口縁は、外傾し、頸部が、ゆるやかにくびれ、胴部にいたる。

口径16.8cm、現高13cm、器厚0.7~0.8cmを測る。

焼成は良好、色調は灰褐色を示し、胎土には、多量の纖維と、ごく細い砂を含んでいる。

文様はL(フ)の斜縞文である。表裏面に指の痕がみとめられる。

4は、深鉢型土器の口縁から胴部上半にかけての個体である。

口縁部に最大径を持ち、底部にむかって直線的にすぼむものと思われる。

口径24.0cm、現高12.0cm、器厚0.6~0.7cmを測る。

色調は、褐色、焼成は良好であり、胎土には、多量の纖維と砂を混入する。

文様は、L(フ)を全体にころがしているが、器面があれていますために明確でない。

5は、口縁から胴部上半にかけての個体である。

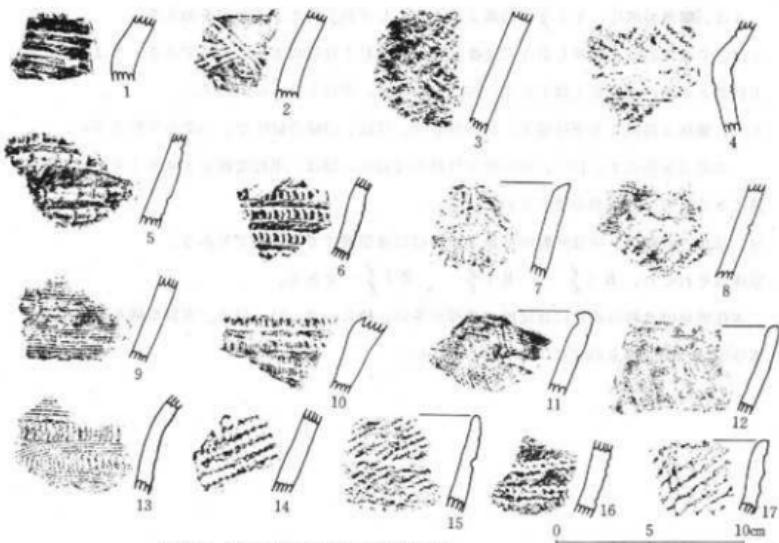
口縁部に最大径を持ち、底部にすぼむ深鉢である。

口径26.0cm、現高16.0cm、器厚0.8~0.9cmを測る。焼成は良好、色調は、褐色を呈す。

胎土には、多量の纖維を混入する。

R(フ)を捺状のものに巻きつけころがした施文方法と考えられる。

内面には、輪積痕が確認できる。



第16図 第3号住居址出土遺物拓影

6は、口縁から頸部にかけての個体である。

波状の口縁は、わずかに内湾し、頸部は、「く」の字状にくびれ、胴部には脇を持ち、底にいたるものと推測される。

口径は、27.4cmを測ると推測され、現高で17cm程である。器厚は、0.9cm。

色調は、褐色を呈し、焼成良好、胎土には多量の纖維を混入する。

口縁から、頸部にかけて、半截竹管による押し引きの施文がみられる。

7は、深鉢型土器の底部である。

底径9.4cm、現高8.9cmを測る。底部は、中央部が、わずかに上げ底になっており、又、周底部は、外へはり出している。

色調は、褐色、焼成は、比較的良好。纖維を多量に混入する。

L ($\frac{1}{2}$) を全体に施している。

内面はきれいになでられている。

次に破片のものをあげる。(第16図)

1、2は竹管による沈線の文様を主体としている。2は、爪形状の文様もみられる。

3は、竹管というよりも、竹ヒゴ状の細い工具による格子状の沈線文を施す。

4は、頭部の破片、R (ℓ) の斜繩文の上に、ヒゴ状工具による沈線を加える。

5は、半截竹管による押し引きの沈線、6は、同じく竹管による爪形文である。7は、ヒゴ状工具による細い沈線を主体としている口縁の破片。8はL (τ) の斜繩文。

9は、梯状工具による平行線文。10は爪形文、11は、口縁の破片で、二条の爪形文下に、

の繩文を施す。12は、細い格子目状の沈線文。13は、平行沈線文と4本1束のヒゴ状工具による突文で沈線の間をうめている。

14、15は、斜繩文、16は回転の押捺文、17は口縁部破片で斜繩文である。

原体はそれぞれ、R (ℓ) 、R (ℓ) 、R (ℓ) である。

本住居址の遺物の破片には沈線の文様が多い。特に、9、11、13は、異質な感を呈する。

本住居址の時期のものでないのかもしれない。

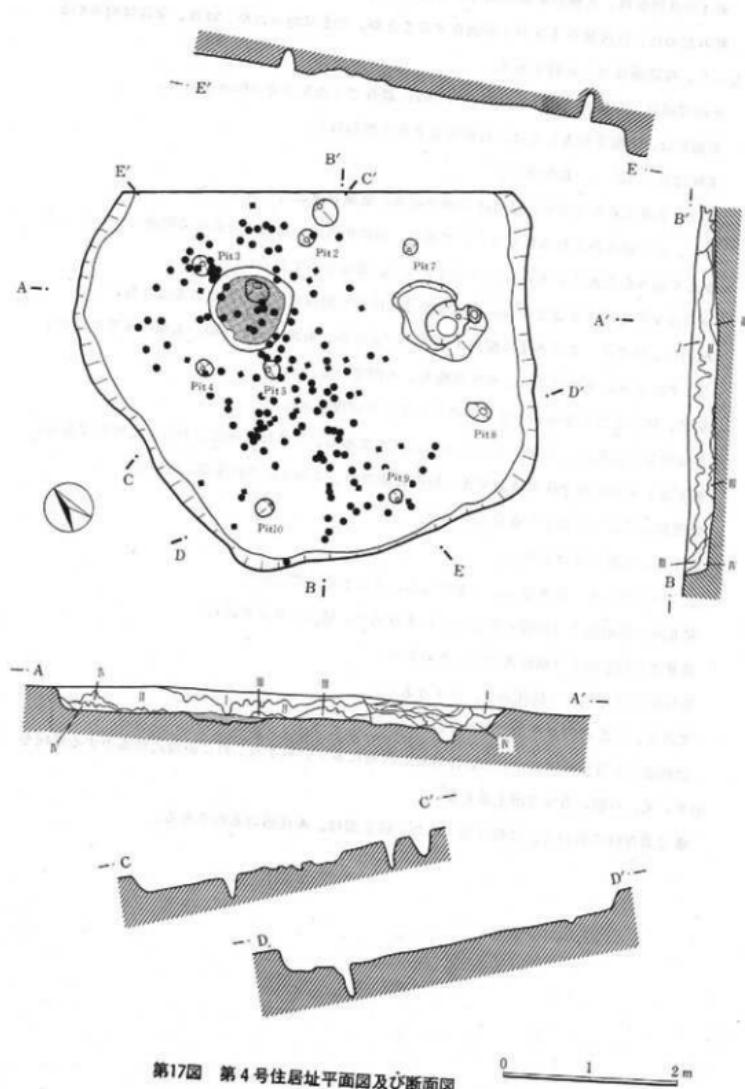
第四章 第二回 陶器の文様とその解説

（1）（2）（3）（4）（5）（6）（7）（8）（9）（10）（11）（12）（13）（14）（15）（16）（17）

《焼成場》、焼成場を示す文様

（1）（2）（3）（4）（5）（6）（7）（8）（9）（10）（11）（12）（13）（14）（15）（16）（17）

第4節 第4号住居址



第17図 第4号住居址平面図及び断面図

第4号住居址は、A地点本調査部分の南部分（ろ。は-18・19）グリットに位置する。
群のために、住居址の4分の1を調査することが、できなかったが、ほぼ、全容は明らかとなつた。確認面はローム層である。

その規模は、長軸で445cmを測り、短軸は、調査できた部分で395cmを測る。

平面形は、不整形もしくは、台形を呈すると思われる。

主軸はN-16°-Eを指す。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は25cmを測る。壁溝は確認できなかつた。

床は、よく踏みかためられたロームであり、特に炉周辺、遺物の分布する範囲で、ひじょうにかたく踏みかためられていた。凹凸は少なく、ほぼ平らである。

柱穴は全部で10本確認できた。その規模は、径15~30cmで、特に大小の差は少ない。

配列は、壁にそって3本ずつ配列するようであるが、東北コーナーの一本が明確ではない。

又、Pit 6は、炉中に在り、その性格も、不明である。

炉は、住居址のほぼ中央やや北西にかたよった位置にある。

規模及び平面形は、100×100cmのほぼ円形である。深さは10cmほどあり、地焼炉である。

焼土は、炉のほぼ全体に確認でき、炉中央部では、7cmほどの層をなしている。

炉底は、ひじょうによく赤化していた。

覆土は、V層に分けられる。

第I層：褐色土（粘性なし、しまりなし、さらさらしている）

第II層：茶褐色土（粘性やや有り、しまりあり、粘土ブロック混入）

第III層：明褐色土（粘性あり、しまりあり）

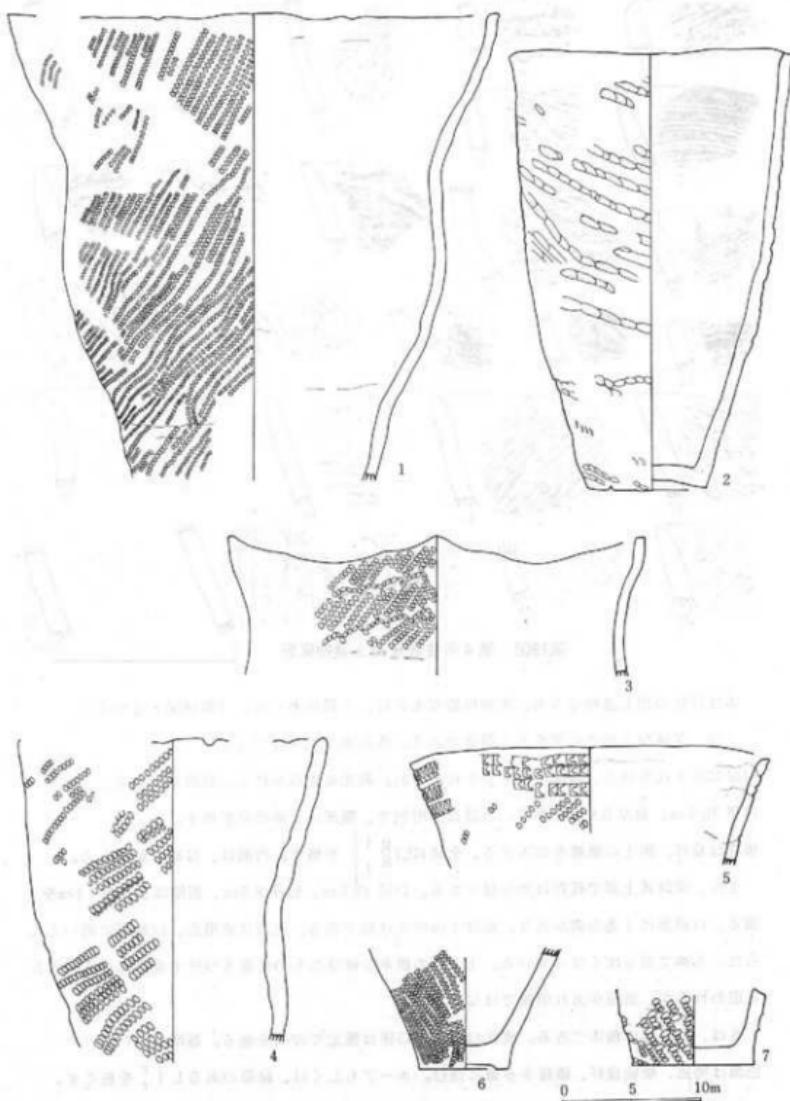
第IV層：明褐色土（粘性あり、しまりあり）

である。ごく自然の流入土である。

遺物は、かなり多く出土した。住居址の西側に多く分布する。特に炉周辺に集中する傾向を示す。又、石器、石片の出土量も多い。

確認調査時において、最初に出土した一括土器は、本住居のものである。

第4号住居址出土遺物



第18図 第4号住居址出土遺物実測図



第19図 第4号住居址出土遺物拓影

本住居址の出土遺物のうち、実測可能なものは、7個体あった。（第18図・1～7）

1は、深鉢型土器の底部を欠く個体である。残存率は35%程度である。

口縁に最大径を持ち、頸部でゆるやかにくびれ、胴部に膨みを持ち、底部にいたる。

口径35.5cm、器厚0.8cmを測る。色調は、褐色で、頸部に火熱の痕を残す。

焼成は良好、胎土に繊維を混入する。全体にL|R| $\frac{1}{1}$ を施す。内面は、なめらかである。

2は、深鉢式土器で残存は70%程度である。口径19.5cm、底径8.5cm、器厚は、0.8～1cmを測る。口唇部に1条の溝があり、底は1cmの上げ底である。色調は赤褐色、口縁部に近いところは、火熱で黒っぽくなっている。L|R| $\frac{1}{1}$ の燃糸を棒状のものに巻きつけて全体にころがしたと思われるが、器面があれ明確ではない。

3は、口縁部の個体である。波状口縁で、口径は推定で30cmを測る。器厚は0.7cm。

色調は褐色、焼成良好、繊維を多量に含む。ループもしくは、縁節のあるL|R| $\frac{1}{1}$ を施す。

4は、胴部下半以下を欠く深鉢である。口径22.4cm、で少しゆがんでいる。器厚は、0.9～

1.4 cm と厚い。色調は、灰色がかった茶色、焼成は悪い。繊維の混入量は少ない。L { r を全体に施こす。器面は荒れている。

5は、口縁部の個体である。口径26cm、器厚0.7~0.8を測る。繊維を多量に混入する。

口縁より3.5cm迄は、半截竹管による押し引き、それ以下は、L { r を棒状のものにまきつけ、ころがしている。

6は、底部の個体である。底径6.6cm、器厚は、1.1cmである。底は、わずかであるが、上げ底である。繊維の混入量は少ない。焼成良好、全面に R { l を施こす。

7は、底部の個体である。底径8.6cm、器厚1cm、底の厚さは1.3cmである。

繊維の混入量は少ない。焼成良好、L { R { R { l の折り返しの部分を1指幅でころがしている。

次に破片をとりあげる（第19図）

1は、口縁部破片よりの悪いR { l をころがしたものである。2は、風化しているために、よくはわからないが、陳帶の上を竹状工具で刺突している。

3は、R { l 、R { l を合わせた多条の繩による施文がみられる。4は底部に近い破片。風化しているため明確ではないがR { l の纏文である。5、7は2本のrの回転押捺6はL { r の纏文。いずれも口縁。8は、多条の纏文をころがす。

9は、竹管による押引き沈線10は、L { r の纏によるループで羽状の効果を、11は、沈線と列点がみられる。12~14は、沈線による文様と思われるが、小破片であり、風化しているため、明確でない。15~18は、単節の斜纏文。それぞれ L { r 、L { r 、L { r 、R { l 。

19は、細い格子目状の沈線、20は竹管をたてに引いた様な文様がみられる。口縁。

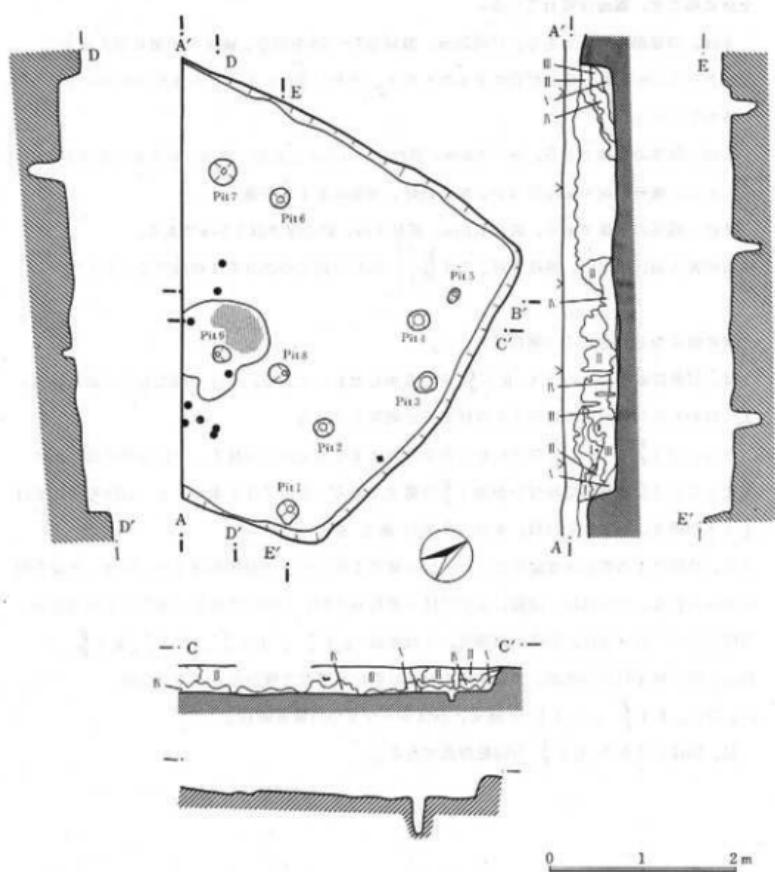
21、22は、R { l 、L { r の纏文、23はループ文の口縁部破片。

24、25は、2本のL { r の回転押捺である。

第19図 口縁部破片の施文

この手筋が「ヤケモセイ」と云ふ。普通の筋目や筋表筋表がある。はね加刃等の筋
等の筋表等を施す事によつて、器表の質感が變化する。表面を覆う物質を施す事によつて、器表の質感が變化する。
この手筋が「ヤケモセイ」と云ふ。普通の筋目や筋表筋表がある。はね加刃等の筋
等の筋表等を施す事によつて、器表の質感が變化する。表面を覆う物質を施す事によつて、器表の質感が變化する。
この手筋が「ヤケモセイ」と云ふ。普通の筋目や筋表筋表がある。はね加刃等の筋
等の筋表等を施す事によつて、器表の質感が變化する。表面を覆う物質を施す事によつて、器表の質感が變化する。

第5節 第5号住居址



第20図 第5号住居址平面図及び断面図

第5号住居址は、A地点本調査部分のほぼ中央部、(い・ほ-9) グリットに位置する。畔及び排土の為、住居址の北半分しか調査できなかった。

その規模は、東壁で 385 cm、北壁で、現状 415 cm を計る。平面形は、東西に長い長方形を呈するとと思われる。主軸は N 51° - E を指す。

確認面はローム層であるが、セクション面を検討することで、南壁は、漸移層を切り込んで

構築されている。

壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、壁高は浅いところで25cm、深いところでは40cmを測る。

壁溝は確認されなかった。

床は、ロームであるが、踏みかためられてはいない。がの周辺さえもかなりやわらかである。

柱穴は、全部で、9本確認された。その規模は、径20~30cm、深さ30~40cmと、いずれも、しっかりしている。

配列は、北壁、東壁に、そって存在するようである。

炉は、住居址のほぼ中央、やや東南にかたよったところにある。探し込みは、かなり大きく現状で、110×95cmほどで、だ円形である。

焼土が、存在するのは、北にかたよった一部で、屑をなす程ではない。

炉底も、よく焼けていない。

覆土は、5層に分けることが可能である。

第Ⅰ層：褐色土（粘性なし、しまりなし、カーボン、焼土粒子混入）

第Ⅱ層：明褐色土（粘性あり、しまりやや有り）

第Ⅲ層：暗褐色土（粘性あり、しまり有り）

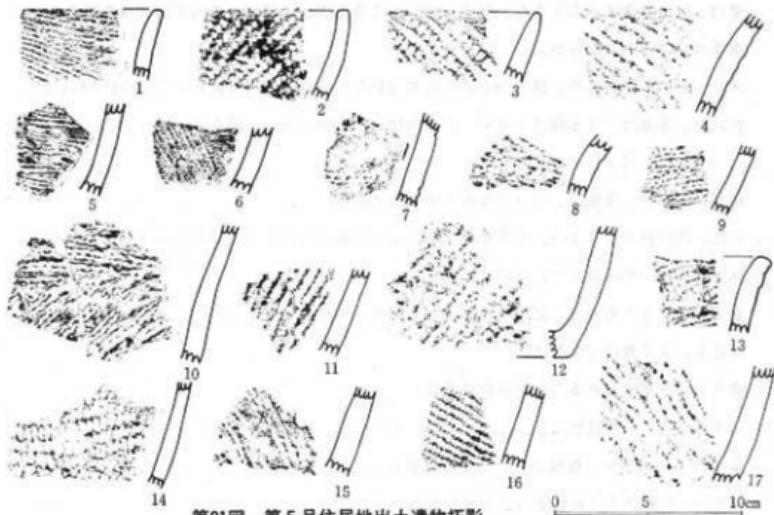
第Ⅳ層：暗褐色土（粘性つよく、しまりあり）

第Ⅴ層：褐色土（粘性あり、しまりあり）

である。層中に、擾乱が多いため、かなり複雑な様相を呈すが、自然流入としてとらえられる。

遺物の出土量は、ひょうに少なく、炉周辺に数片みられるのみである。

第5号住居址出土遺物



第21図 第5号住居地出土遺物拓影

本住居址の出土量は少ない。実測可能な個体はなく破片のみであった。(第21図)

1～6は、縄文を中心とする文様である。

1は、 $L \wr \ell$ の縄文を、2は $L \wr \ell$ の縄文、3は $R \wr \ell$ の縄文をころがす。いずれも口縁部分の破片である。4は風化しており文様ははっきりしないが、燃りのよわい多条の文様を施したうえに、竹管による沈線を施している。5は、2本の ℓ を回転押捺している。

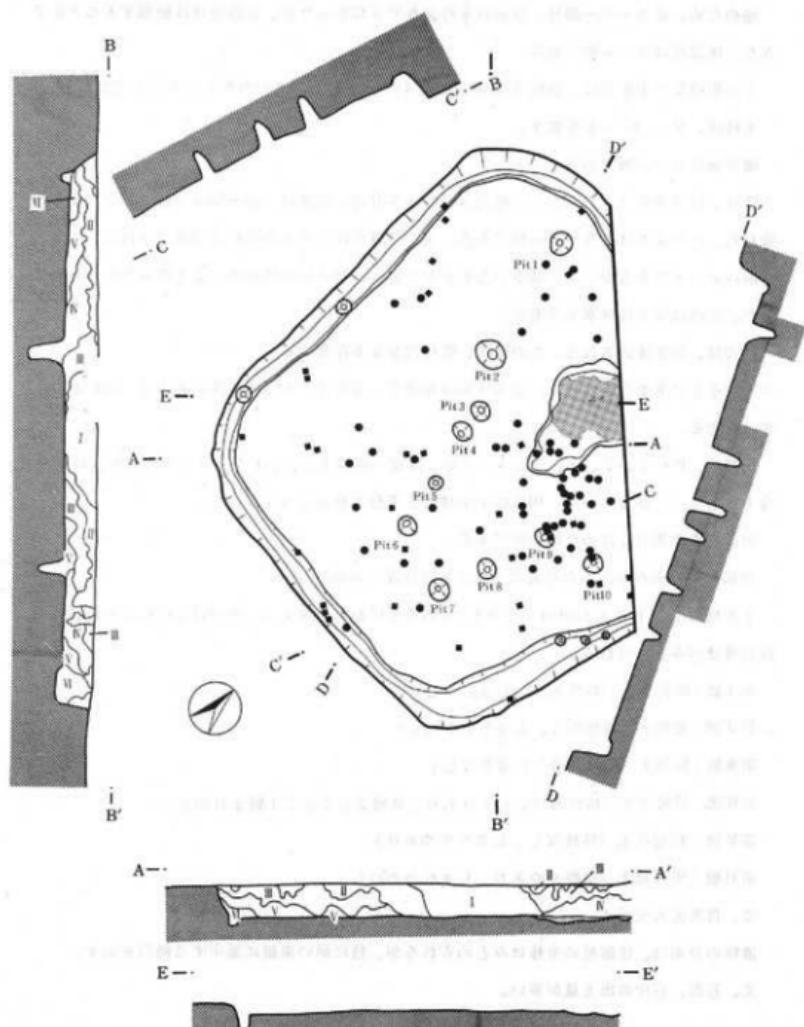
6は、 $R \wr \ell$ の縄文を羽状に、7は、半截竹管による爪形文を施す。8は、縄文の上を、竹管による押し引きしていると思われる。9は、2本の $R \wr \ell$ を回転による押捺している。

10も回転による押捺であるが、羽状の効果を持たせている。

11、12は、 $L \wr \ell$ の斜縄文、12は、底部付近の破片である。13は、燃りのよわい $L \wr \ell$ をころがしたもので、羽状の効果をみせる。14は $L \wr \ell$ の斜縄文。15は、 $R \wr \ell$ 、 $L \wr \ell$ の2本の縄を回転押捺、16は $R \wr \ell$ の17は $R \wr \ell$ の斜縄文である。

破片には、いずれも胎土に多量の繊維を含む。

第6節 第6号住居址



第22図 第6号住居址平面図及び断面図

0 1 2 m

第6号住居址は、A地点本調査部分のほぼ中央部（い・ろー10）グリットに位置する。

畠のため、北コーナー部分、住居の $\frac{1}{3}$ 程調査できなかったが、全容をほぼ把握することができた。確認面はローム層である。

その規模及び平面形は、長軸520cm、短軸480cmを測る隅丸の台形を呈すると思われる。

主軸は、N - 10° - Eを指す。

確認面はローム層である。

壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、壁高は、35cmを計る。壁溝は、25~50cmの幅で、全周すると思われ、その深さは、5~10cm程である。又、壁溝中に、5本の壁柱穴が確認された。

床はロームであるが、よく踏みかためられており、特に炉の周辺は、よく踏みかためられた。凹凸はなくほぼ水平である。

柱穴は、10本確認された。この他に、壁柱穴が5本存在する。

その大きさにあまり差はなく、径15~30cmを測る。深さは、もっとも深いもので（Pit 2）40cmを測る。

配列は、Pit 1、2、3、4、5、6が、ほぼ一直線上に、pit 7、8、9、10が、ほぼ一直線上にある。しかしながら、明確に上屋構造を予想させるものではない。

炉は、床を掘りくぼめた地焼炉である。

住居址の中央から、かなり北にかたよった位置にある。

その規模は、140×100cmの不整形であると思われ、焼土は、炉のほぼ中央部分に、10cm程の堆積がみとめられる。

第Ⅰ層：暗褐色土（粘性あり、しまりなし）

第Ⅱ層：褐色土（粘性なし、しまりややなし）

第Ⅲ層：褐色土（粘性あり、しまりなし）

第Ⅳ層：茶褐色土（粘性あり、しまりあり、Ⅲ層よりくらくⅠ層より明るい）

第Ⅴ層：暗褐色土（粘性なし、しまりややあり）

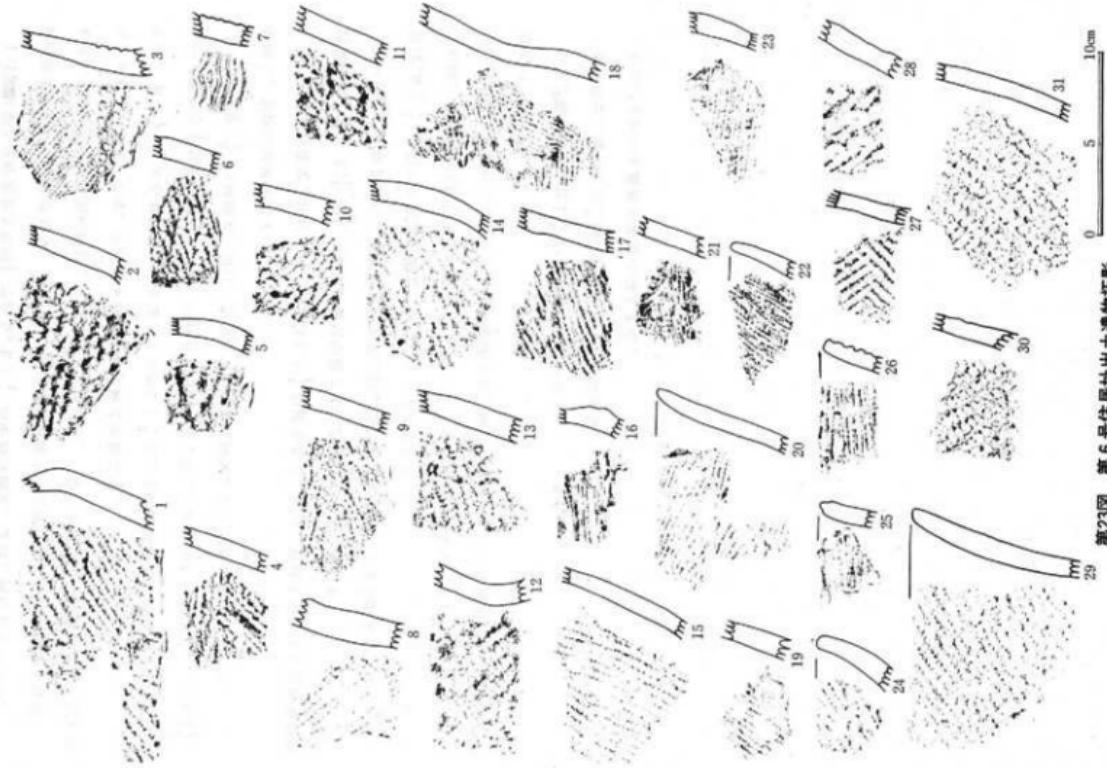
第VI層：明褐色土（粘性ややあり、しまりややなし）

で、自然流入を示す。

遺物の分布は、住居址の全体にみとめられるが、特に炉の東側に集中する傾向を示す。

又、石器、石片の出土量が多い。

第 6 号住居址出土遺物



第23圖 第6號住居址出土遺物拓影

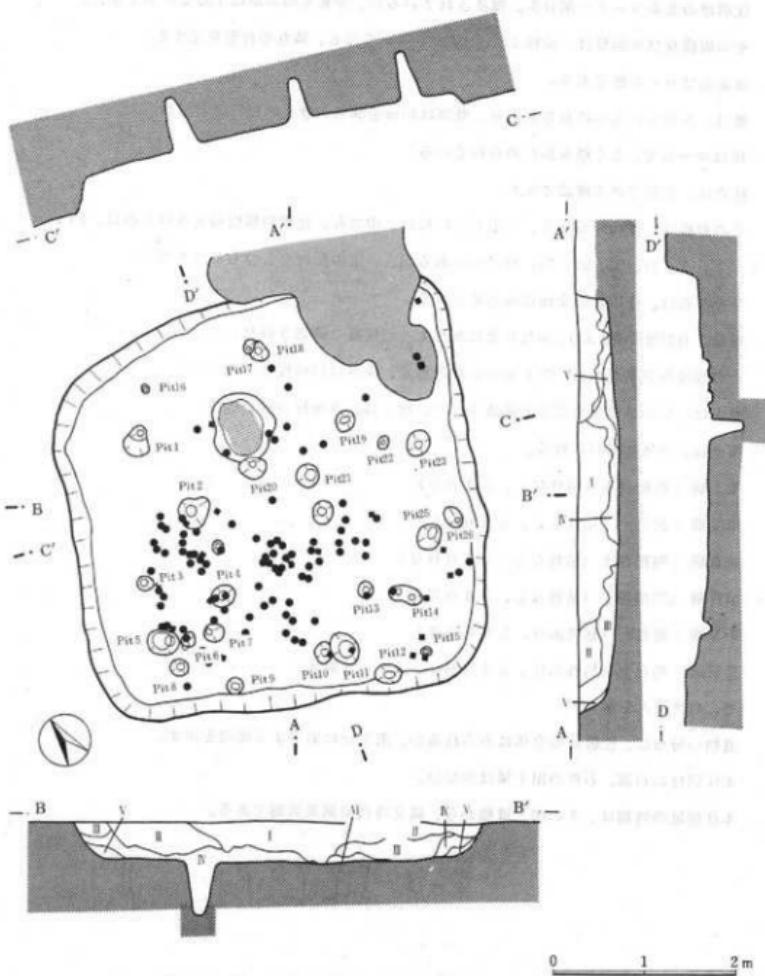
本住居址の出土遺物のうち実測可能なものはなく、すべて小破片である。（第23図）

- 1は、胴部の比較的大きな破片である。 $L \{ \frac{r}{r}$ の単節斜繩文。2は、風化しているが、 r の縫によるループ文である。3は、 $R \{ \frac{r}{\ell}$ の縫の斜繩文下に竹管による列点がみられる。4は、2本の $L \{ \frac{r}{r}$ の回転押捺、5は風化しているが、 ℓ によるループ文であると思われる。6もループ文。7は、竹管による波状の沈線文を施す。8は、 $R \{ \frac{\ell}{\ell}$ による羽状繩文、9は、2本の $L \{ \frac{r}{r}$ による回転押捺による文様。10、11にはループ文がみられる。12～15は、いずれも風化がいちじるしいが、それぞれ $R \{ \frac{\ell}{\ell}$ 、 $R \{ \frac{r}{r}$ の斜繩文。14は、竹管による平行沈線文。17、18は、燃りのよわいを施し、羽状の効果を出す。19、20は、斜繩文、19は、 $R \{ \frac{\ell}{\ell}$ 20は $L \{ \frac{r}{r}$ の縫である。21は、竹状工具による沈線を羽状効果状に、22は、 $L \{ \frac{r}{r}$ 、 $R \{ \frac{r}{\ell}$ の多条の縫文を施す。23は、沈線文を施す。24～26は、口縁部破片。24は、ループ文、25、26は、竹状工具による沈線文を施す。27は、 $R \{ \frac{r}{r}$ の縫による羽状繩文、28は、ループ文である。29は、口縁部の比較的大きな破片である。 $L \{ \frac{r}{r}$ の単節斜繩文を施す。30は、胴部中央あたりの破片か、単節斜繩文で、輪づみ底もしくは、竹状工具による細い、沈線部がみられる。31は、胴部破片。 $L \{ \frac{r}{r}$ の単節斜繩文である。
- 本住居址の遺物には、縫文を主体とするものが多い。
そのいずれにも纖維を多量に混入する。



後張掛土出土器物 33 個 第23図

第7節 第7号住居址



第24図 第7号住居址平面図及び断面図

第7号住居址は、A地点本調査部分のやや南部分の（は・と-15・16）グリッドに位置する。

住居址の北東コーナー部分が、攪乱されているが、全貌を明らかにすることができた。

その規模及び平面形は、長軸450、短軸440cmを計る、隅丸の台形を呈する。

確認面はローム層である。

壁は、ややなだらかにたちあがり、壁高は40cmを測る。壁高は確認できなかった。

床はロームで、よく踏みかためられている。

柱穴は、全部で26本確認できた。

その規模は、径10~35cmと、一定していない。中でも、比較的規模の大きなものは、Pit 1、2、5、11、20、21、23、24、25であるが、一定の配列をもつものでもない。

その分布は、住居址の全体にみとめられる。

炉は、住居址の中央より、かなり北にかたよった位置で確認された。

その規模及び平面形は、75×70cmのだ円形で、深さは10cm程である。

焼土は、炉のはば中央部分で確認された。厚さは、5cm程の層をなす。

覆土は、5層に分けられる。

第Ⅰ層：暗褐色土（粘性なし、しまあり）

第Ⅱ層：褐色土（粘性なし、しまりなし）

第Ⅲ層：明褐色土（粘性なし、しまり有り）

第Ⅳ層：明褐色土（粘性なし、しまりなし）

第Ⅴ層：褐色土（粘性あり、しまりあり）

第VI層：褐色土（粘性あり、しまりあり、カーボン混入）

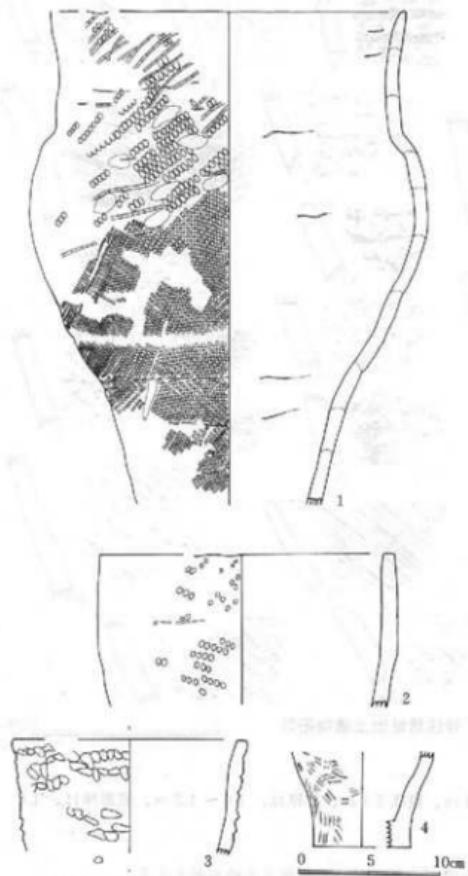
で、自然流入を示す。

遺物の分布は、住居址の全体にみられるが、両半分に集中する傾向を示す。

本住居址の石器、石片の出土量は少ない。

本住居址の時期は、その出土遺物から、縄文時代前期黒浜期である。

第7号住居址出土遺物



第25図 第7号住居址出土遺物実測図

思われ、やや波状になるか？

器厚は 1.2 cm、現高 10.7 cm を測る。

3 は、口縁部の個体である。口径は 16.6 cm を測り、現高 8 cm である。器厚は 0.9 ~ 1 cm 程度である。焼成良好、色調淡褐色、胎土に繊維多量混入、小砂混入する。

文様は、ループ文であるが、その原体は、よくわからない。内面はよくなでられている。

本住居址の出土遺物のうち実測可能な個体は 4 個体である。（第25図・1 ~ 4）

1 は、底部を欠く深鉢である。

口縁が、わずかに外湾し、頭部は、ゆるやかにくびれ、胴部に脇みを持ち、底部へとづく。

残存率は、少なく 20 % ほどである。口径 25.2 cm を計ると推測される。

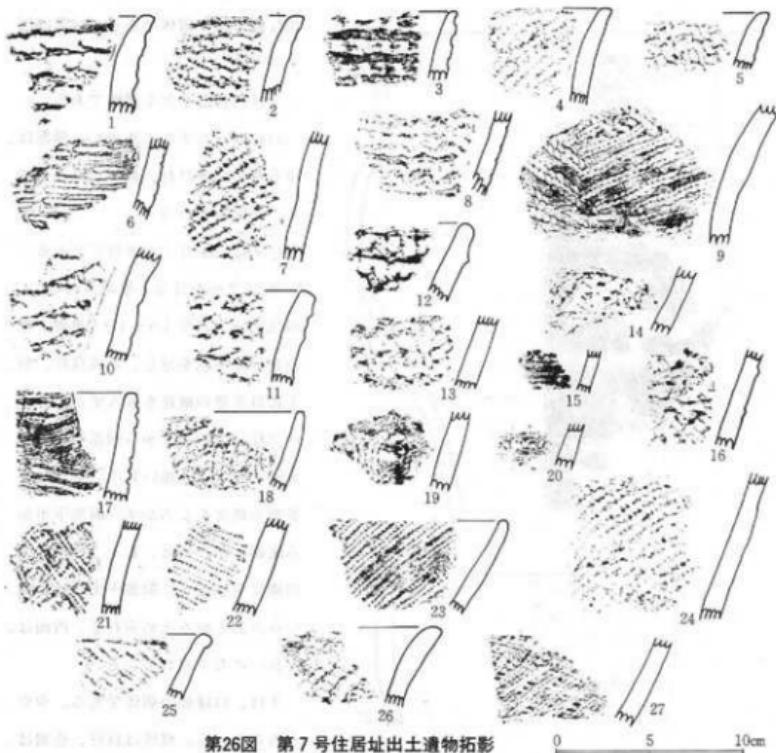
現高 35 cm、器厚 1.0 ~ 1.2 を推測する。色調は赤褐色を呈し、焼成良好、胎土には多量の繊維を混入する。

文様は、口縁部から胴部中央まで太めのし「^フ」と細いし「^フ」を合わせ多条の網文をこらがす。胴部下半から底部にかけては、し「^フ」の単節の斜網文を施す。胴部下半には、輪づみのあとがみとめられる。内面は、きれいになでられている。

2 は、口縁部の個体である。やや内湾している。焼成は良好、色調は、淡褐色を呈し、胎土には、繊維を多量に混入する。表面の文様は、ややぼくなっており、不鮮明であるが、し「^フ」を施したものと思われる。

又、口唇部は、指頭で押しつけたと

第26図 第7号住居址出土遺物拓影



第26図 第7号住居址出土遺物拓影

0 5 10cm

次に破片について説明する。

4は、底部破片である。底形は7.0cm、現高7.3cm、器厚は、1.0～1.2cm、底部厚は、1.8cmを測る。

色調は赤褐色で内側はこげている。焼成良好、胎土に纖維と小砂を混入する。

表面は、竹状工具による条痕状の文様を呈す。

次に破片について説明する。(26図)

1～5は、口縁部破片。1、2、5は、ループ文を、3は半載竹管による押し引き沈線。

4は、L字の単節斜綱文である。6は、竹状工具による平行沈線文、7は、L字の斜綱文。

8は、波状の沈線文を施す。9は、2本のL字を回転押捺し、羽状の効果を出す。

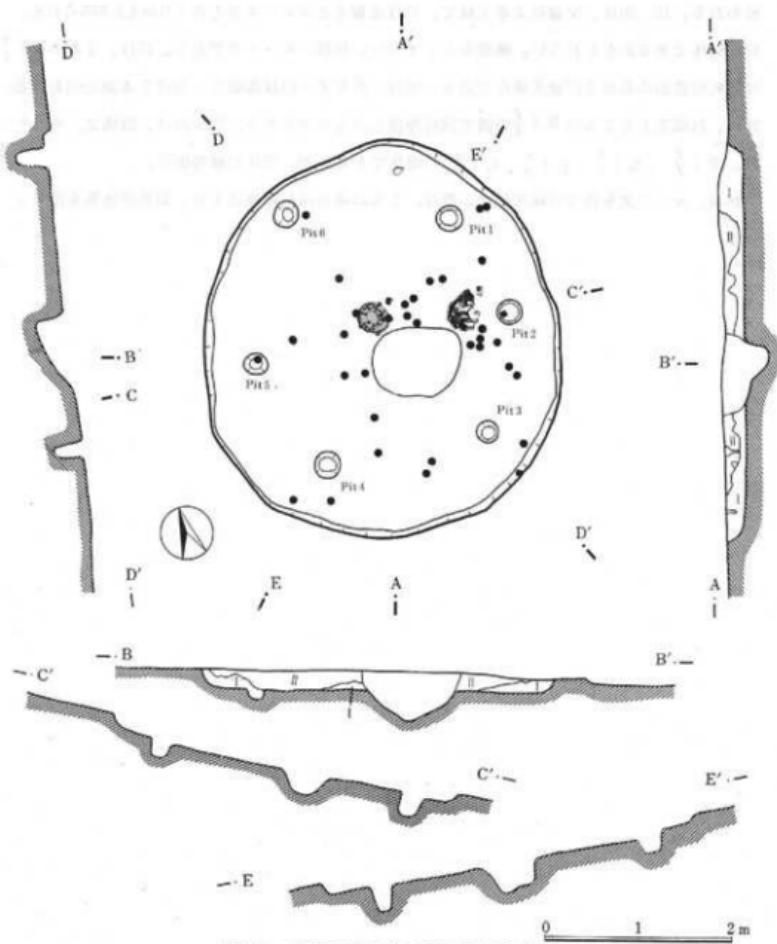
10～13は、ループ文を施す破片である。11、12は口縁部破片、10、13は、口縁部に近い位置の破片である。14は、風化しているために、明確ではないが、 $L \downarrow \frac{r}{r}$ と r の多条の文様と思われる。15、20は、沈線による文様で、平行沈線文とコンバス文とのくりかえしがみられる。同一個体であるかもしれない。繊維をふくまない。16は、ループ文であり、17は、2本の $L \downarrow \frac{r}{r}$ の回転押捺がみられる口縁部破片である。18は、爪形文の口縁部破片、19は2本繩の回転押捺21は、斜繩文上を2本の $R \downarrow \frac{e}{e}$ の繩で回転押捺したものであろう。22～25は、斜繩文。それぞれ、 $R \downarrow \frac{e}{e}$ 、 $L \downarrow \frac{r}{r}$ 、 $L \downarrow \frac{T}{T}$ 、 $L \downarrow \frac{T}{T}$ の原体である。23、25は口縁部破片。26は、ループ文を持つ口縁部破片。27は、2本の繩の回転押捺により、羽状の効果を出している。



図版番号：11-13、15-17、19-21、23-25、27
出所：大谷地区出土（奈良県）

参考文献：大谷地区出土（奈良県）

第8節 第8号住居址（B地点）



第27図 第8号住居址平面図及び断面図

番8号住居址はB地点（B-2）グリットに位置する。（B-2）グリットは傾斜をのぼりきった平坦面に存在する。

本住居址は他2軒の住居址（第9号住居址、第10号住居址）との切り合いがみとめられる。

本住居址はB地点中残存状態の最も良い住居址である。平面形はだ円形もしくは円形を呈し、

その規模は 426cm × 380cm、主軸は N-22°-E である。

壁はややなだらかに立ち上がり、その深さは 10cm である。壁溝は確認できなかった。

床はロームであり、炉の周辺はよく踏みかためられていた。

柱穴は 8 本確認することができた。8 本とも同形態をしており、その規模は 径 25cm ~ 30cm、深さ 20cm ~ 35cm ほどである。

配列は壁から約 60cm ほど内側に定間隔に円形状を呈す。住居址の中心に対し、対象的に配列されている。

炉は、住居址のはば中央やや北によったところに位置する。形態は埋炉であり、底をうちかいた浅鉢形土器を使用していた。

その規模は、径 35cm、深さ 10cm であり、明確な焼土は認められなかつたものの、その覆土には多量の焼土粒子と炭化物粒子を含み、底になるほどそれらの混入が多くなる。

住居址内覆土は 2 層に分けることが可能である。

第Ⅰ層：明褐色土（粘性やや有り、しまりある、ローム粒子多量混入）

第Ⅱ層：褐色土（粘性なし、ローム粒子を少量混入）

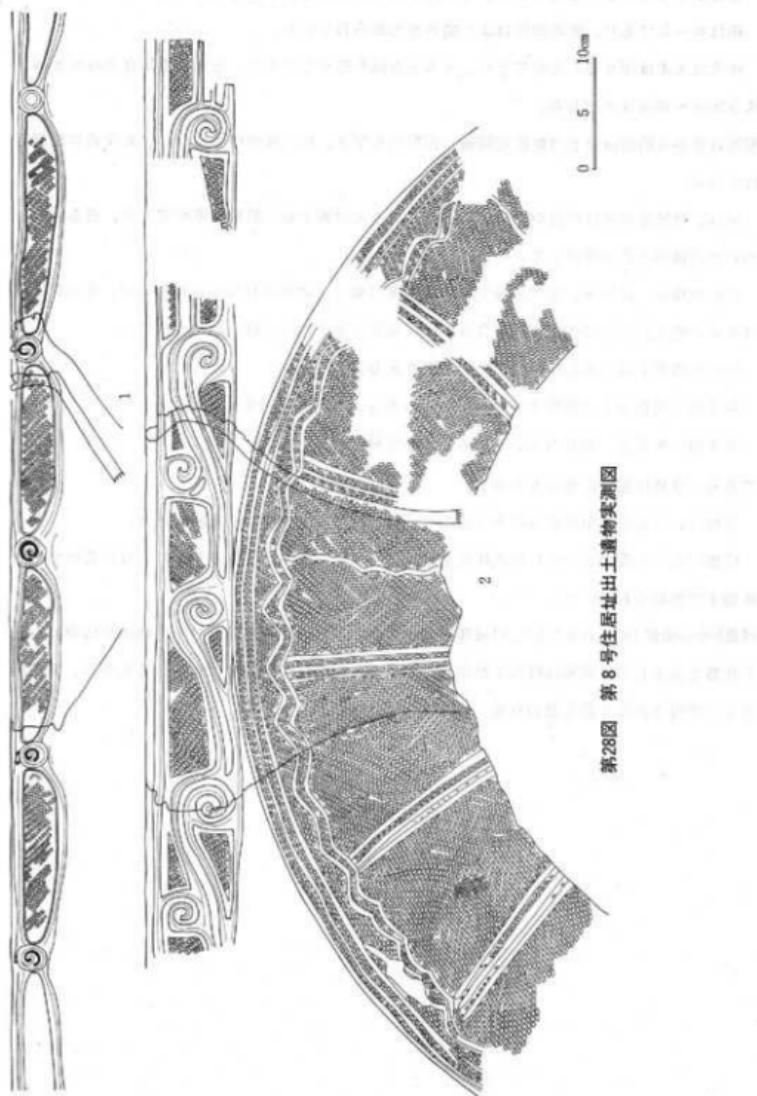
である。堆積状態は自然流入を示す。

遺物は、住居址の中央部分に多く分布し、特に炉周辺に集中する傾向を示す。

埋甕炉として使用されていた浅鉢形土器は底部は打ち欠かれているものの、ほぼ完形であり床面まで埋められていた。

埋甕炉から東側 100cm のところに、口縁部径 33cm、高さ 28cm の深鉢形土器の一括個体が床面にふせた状態で出土した。底部は打ちくだかれており、内部の焼成がはなはだしいことから、埋甕炉として使用された土器と思われる。

第8号住居址出土遺物



第28圖 第8号住居址出土遺物実測図

本住居址の出土遺物のうち復元できたものをあげた。

1は、底部を欠く浅鉢形土器である。残存率90%。本住居址の炉体土器である。

口径29cm、現高10cm、器厚1.0cmを測る。

口縁部は隆帯はりつけによる2重口縁で、口辺部には5ヶのうずまきを有する把手を持つ。

又、隆帯で区画された繩文帯は、 $R \frac{1}{1}$ の単節斜縄文を施している。その下は、無文帯で、底部へとつづく。1つの文様が、五回くりかえされているが、その間隔は均一ではない。

5個の把手にはうず巻の文様が施こされているが、巻き具合は同一ではない。

表面の胴部下半及び内面は、指頭及びヘラ状工具による丁寧な器面整形がみられる。

焼成は良好、褐色を呈し、胎土には、小砂を多量に混入する。

2は、キャリバー状を示す深鉢で、胴部下半を欠損する。

口径32.3cm、現高28cm、器厚1.0cmを測る。

口縁は隆帯はりつけによる2重口縁を呈し、大きく内湾し、ゆるやかに外湾して胴部へとつづく。焼成良好、色調は褐色、胎土には、小砂を多く含む。

口縁部文様帶は、太い隆帯で、尾の付いたうず巻状に区画し、そのうず巻にだかれるような形で太い沈線とともに、三角形、方形の区画を構成している。その中は $L \frac{1}{1}$ を施文しているが、一部に $R \frac{1}{1}$ がみられる。

胴部文様帶は地文に $L \frac{1}{1}$ を施し、頭部に太い沈線を3周させ、その下に波状の沈線を2本めぐらしている。

波状の沈線及び3本の直線を垂下させ、同間隔で5つに区画している。

本個体は、内面の焼成がはなはだしく、胴部下半を、意識的に打ち欠いており、炉体土器としての可能性を持つが、出土状況は、それを示すものではない。

加曾利E式に比定できる。

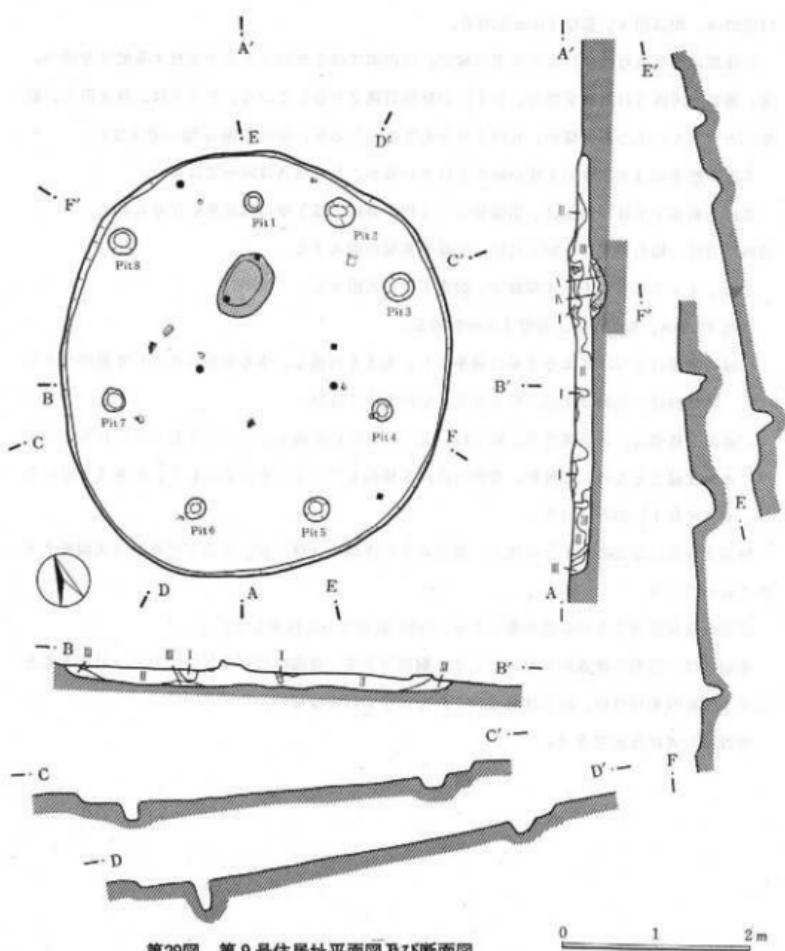


本住居址の出土遺物のうち復元できたもの

より、左は「深鉢」、右は「浅鉢」。左の深鉢は、口縁部に5ヶの把手を持つ。右の浅鉢は、口縁部に2ヶの把手を持つ。

また、右の浅鉢の口縁部は、斜縄文を施したものである。左の深鉢の口縁部は、単節斜縄文を施したものである。

第9節 第9号住居址（B地点）



第29図 第9号住居址平面図及び断面図

第9号住居址はB地点（C-2）グリットに位置する。（C-2）グリットは傾斜を登りきった平坦面に存在する。

本住居址は第8号住居址との切り合いがみとめられ、第8号住居址の東側に位置する。

本住居址は第8号住居址に次いで大きな住居址である。平面形はだ円形もしくは、円形を呈

し、その規模は 460 cm × 416 cm、主軸は N - 52° - E である。

壁はややなだらかに立ち上がり、その深さは、10 cm 程である。壁溝は確認できなかった。
床はロームであり、炉の周辺はよく踏みかためられていた。

柱穴は 8 本確認することができた。8 本とも同形態をしており、その規模は 径 20 cm ~ 30 cm、
深さ 20 cm ~ 35 cm ほどである。

配列は壁から約 60 cm ほど内側に定間隔に円形状を呈す。住居址の中心に対し、対照的に配列
されている。

炉は住居址の中心より 80 cm ほど北に寄ったところに位置する。形態は地焼がである。

その規模は、15 cm × 50 cm のだ円形、深さ 20 cm で、明確な焼土は認められず、その覆土に少量
の燒土粒子と炭化物粒子が認められたのみで、不鮮明な地焼がである。

住居址内覆土は 3 層に分けることが可能である。

第Ⅰ層：暗褐色土（粘性なし、しまり有り、ローム粒子を少量混入）

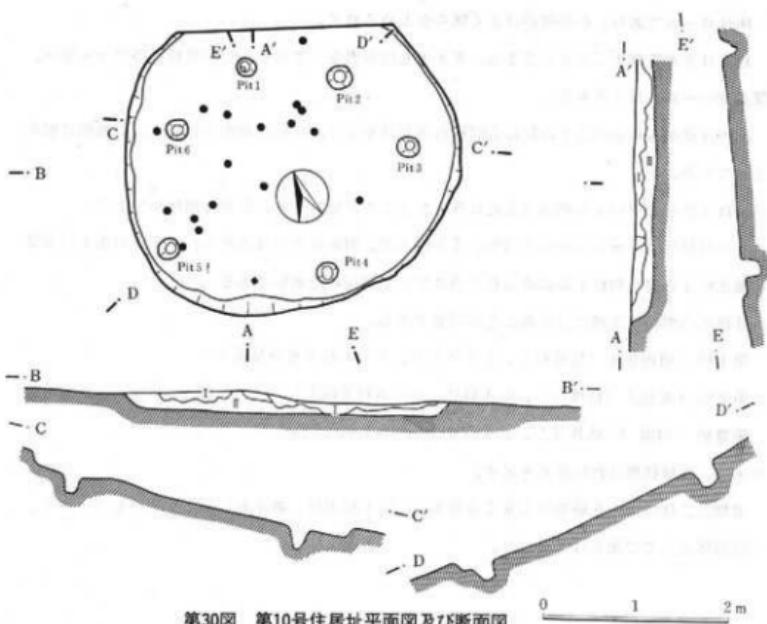
第Ⅱ層：褐色土（粘性なし、しまり有り、ローム粒子混入）

第Ⅲ層：明褐色土（粘性なし、しまり有り、ローム層に近い）

である。堆積状態は自然流入を示す。

遺物は、住居址の北側部分に多く分布する。出土状況は、破片として出土したものが多く、
一括個体としての出土はなかった。

第10節 第10号住居址（B地点）



第30図 第10号住居址平面図及び断面図

第10号住居址はB地点（B-1）グリットに位置する。（B-1）グリットは傾斜をのぼりきった平坦面に存在する。

本住居址は第8号住居址との切り合いがみとめられ、第8号住居址の北側に位置する。

本住居址の北側一部分は、調査区外により未調査である。

本住居址はB地点中最も小規模な住居址である。平面形は梢円形もしくは円形を呈し、その規模は360cm×300cm。

壁はややなだらかに立ち上がり、その深さは15cm程度である。壁溝は確認できなかった。

床はロームである。

柱穴は6本確認することができた。6本とも同形態をしており、その規模は径20cm～30cm、深さ20cm～25cmほどである。

配列は壁から約40cmほど内側に定間隔に円形状を呈す。住居址の中心に対し、対照的に配列

されている。

炉は認められなかった。

覆土は2層に分けることが可能である。

第Ⅰ層：暗黄褐色土（粘性はなく、しまりない、ローム粒子混入）

第Ⅱ層：明黄褐色土（粘性はなく、しまりやや有り、ローム粒子混入）

である。堆積状態は自然流入を示す。

遺物は住居址全体に分布し、出土状況は、破片として出土したものが多く、一括個体としての出土はなかった。



図面13 佐原城平穴跡出土品

第11節 第1号炉穴



第31図 第1号炉穴平面図及び断面図

第1号炉穴は、A地点本調査区の西南部（い・ろー15、16）グリットに分布する。確認面はローム層であり、8基の炉穴の集合体である。新しいものからA、B～Hとした。しかしながら、それぞれの切り合いのないものがあり、新旧関係をとらえれば、A・C・H→B・F・G→D・Eである。

A炉穴は、 $130 \times 70\text{cm}$ を計る楕円形を呈する。深さは、 65 cm を計測する。壁はほぼ垂直に立ちあがり、地底はほぼ平らである。

焼土は、やや両壁によって厚さ 10 cm 程で堆積しており、床及び壁は、非常によくやけている。Bは、 $90 \times 90\text{cm}$ を測る不整の楕円形である。Aによって切られている。壁は、ややゆるやかに立ちあがる。焼土は、西南壁にかたよった位置に確認された。床及び壁はよくやけ赤化している。

Cは、 $100 \times 90\text{cm}$ を測る小判型を呈する。深さは 70 cm を測る。壁は、ややゆるやかに立ちあがる。西壁にそって焼土が確認された。最も焼土の厚いところで 25 cm 程あり、床及び壁は、よくやけている。

Dは、 $100 \times 90\text{cm}$ の楕円形を呈するものと思われるが、B及びCによって切られているため全体の形状は不明である。焼土は、床のほぼ中央で確認された。

Eは、 $120 \times 75\text{cm}$ の小判型を呈すると思われるが、A及びBによって切られており、全体の形状は明確でない。深さは 40 cm を測る。焼土は西壁によって確認された。床、壁は赤化している。

Fは、 $100 \times 90\text{cm}$ の小判型を呈する。Cによって切られている。本炉穴群の中で唯一、煙出しを有するものである。北西をむいた方向にとりつけられている。

焼土は、北壁、煙出しにそった位置に堆積する。厚さ 6 cm を計測する。壁、床は、よくやけ赤化している。

Gは、 $120 \times 90\text{cm}$ を計測する楕円形を呈する。Cによって切られている。

焼土は、床全体に確認され、厚さ 10 cm を計る。床はよくやけている。

Hは、 $100 \times 90\text{cm}$ を測る不整円形を呈する。A～Gのいずれとも切り合はない。

焼土は、床の中央部に確認され、厚さ 15 cm を測る。

本炉穴群で、土層断面を観察できたものは、CとFでしかなかった。

Cは、7層に分けられる。

第I層：褐色土（粘性なし、しま有り、カーボン粒子混入）

第II層：褐色土（粘性なし、しま有り、カーボン粒子混入、土層よりくらい）

第III層：褐色土（粘性有り、しまりなし）

第IV層：暗褐色土（粘性有り、しまり強い、カーボン、焼土、粒子混入）

第Ⅴ層：暗色土（粘性有り、しまり大変よい、焼土粒子多量に混入）
 第VI層：赤褐色土（焼層、ブロックが多い）
 第VII層：焼土層（これより下の層は、火葬場の火葬灰であるが、土層よりくらいたる。又、F炉穴は、6層に分けられる。）
 第I層：褐色土（粘性なし、しまり有り、カーボンブロック混入）
 第II層：褐色土（粘性なく、しまり有り、カーボンブロック混入、土層よりくらいたる）
 第III層：褐色土（粘性有り、しまりなし）
 第IV層：暗褐色土（粘性有り、しまりつよい、カーボン、焼土粒子混入）
 第V層：暗褐色土（粘性有り、しまりつよい、粘土粒子多量混入）
 第VI層：焼土層

である。又本炉穴群では、A、B、C、D、Fを中心にして遺物の出土がみられた。特に、C、D、Fの周辺に遺物の集中がみられる。

出土した土器片は、いずれも条痕文、野島式に比定できるものである。

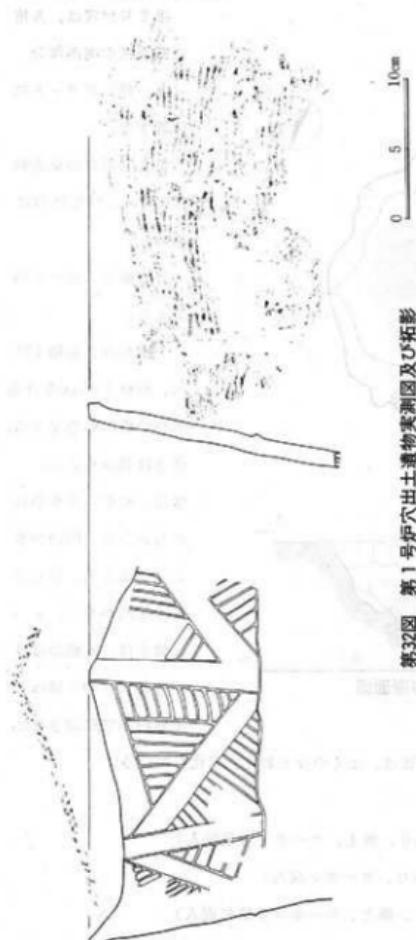
（参考）野島式条痕文（土器片）：縦の條痕を有する土器片で、主として縦方向に施された條痕で、その上に横方向に施された條痕がある。主として縦方向に施された條痕で、その上に横方向に施された條痕がある。

（参考）野島式条痕文（土器片）：縦の條痕を有する土器片で、主として縦方向に施された條痕で、その上に横方向に施された條痕がある。

（参考）野島式条痕文（土器片）：縦の條痕を有する土器片で、主として縦方向に施された條痕で、その上に横方向に施された條痕がある。

（参考）野島式条痕文（土器片）：縦の條痕を有する土器片で、主として縦方向に施された條痕で、その上に横方向に施された條痕がある。

第1号炉穴出土遺物



第1号炉穴から出土した遺物のうち接合復元できたのは1個体であった。

(第32図)

口縁は、波状口縁を呈し、口唇部には、格状体の压痕を有する。

口縁より12cmのところまで、断面三角形の細い粘土面をはりめぐらし、三角形と長方形を主体とする区画をしている。

この文様帶以下は無文で、条痕はみとめられない。

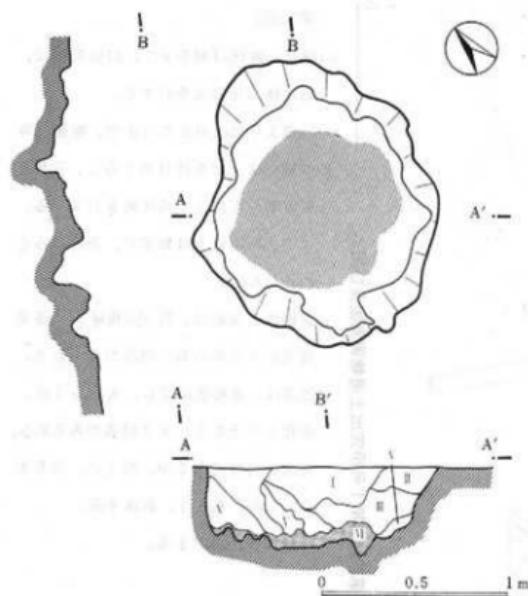
裏面は、全面に、貝がら複縁による条痕がみとめられ、剥落がみられる。

色調は、赤褐色を呈し、火熱をうけ、赤化したところ、スス付着がみられる。焼成は良好であるが、胎土に、砂を多くふくみ、もろく、剥落する。

野島式に比定できる。

第32図

第12節 第2号炉穴



第33図 第2号炉穴平面図及び断面図

その厚さは、5~15cmである。焼土下の炉底は、よくやけており、赤化している。

覆土は、6層に分けることができる。

第Ⅰ層：明褐色土（粘性なし、しまりあり、焼土、カーボン少量混入）

第Ⅱ層：明褐色土（粘性なし、しまりあり、カーボン混入）

第Ⅲ層：褐色土（粘性なし、しまりあり、焼土、カーボン多量に混入）

第Ⅳ層：明褐色土（粘性ややあり、しまりあり、焼土、カーボン混入）

第Ⅴ層：褐色土（粘性ややあり、しまりあり、焼土、カーボン混入）

第VI層：赤褐色土（焼土層）

である。

本炉穴からの出土遺物は、なかったが、他の炉穴と同じ時期のものと考えられる。

又、本炉穴は、1基のみで、切り合いは確認されない。

第2号炉穴は、A地点調査区の南西部分

(3-15) グリットに位置する。

第1号炉穴の東方約1.5mはなれた位置にある。

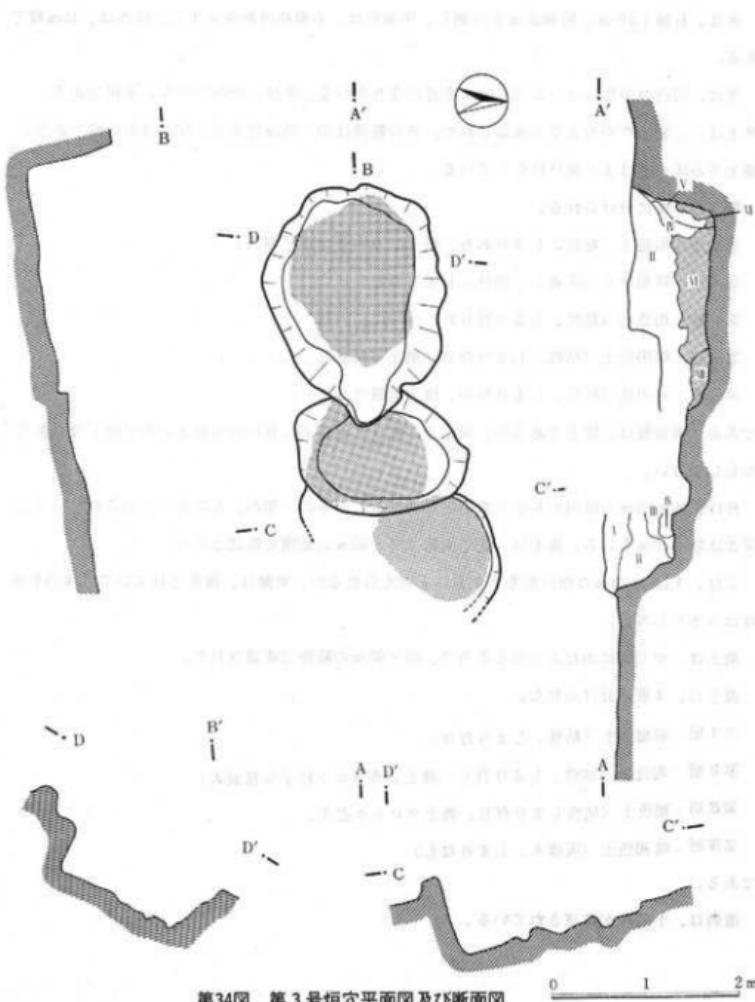
確認面は、ローム層である。

平面形は、長軸155cm、短軸125cmを計る不整の梢円形を呈する。深さは45cmを計る。

壁は、ややゆるやかにたちあがり、凹凸が多い。炉底も又、平らでなく凹凸が多い。

焼土は、炉底のはぼ中央部に、90×85cmの不整円形で確認された。

第13節 第3号炉穴



第34図 第3号炉穴平面図及び断面図

第3号炉穴は、A地点本調査区の南西部（3-14、15）グリットに位置する。第1号炉穴の北、ほぼ5mの所にある。

確認面は、ローム層である。

本炉穴は3基の炉穴の集合であり、新しいものから、A・B・Cとした。AとBは、西壁面にある。

Aは、長軸130cm、短軸95cmを計測し、平面形は、不整橢円形を呈する。深さは、45cm程度である。

壁は、凹凸の少ないロームで、ほぼ垂直に立ちあがる。床は、凹凸の少ない平坦である。

焼土は、底のやや西よりで確認された。その範囲は90×65cmである。厚さは20cm程度である。

焼土下の床や壁はよく焼け赤化している。

覆土は5層に分けられる。

第Ⅱ層：褐色土（粘性、しまりあり、焼土、カーボン粒子混入）

第Ⅳ層：暗褐色土（灰液入、粘性、しまりなし）

第Ⅴ層：褐色土（粘性、しまり有り）

第Ⅵ層：暗褐色土（粘性、しまり有り、焼土多量混入）

第Ⅷ層：赤褐色（粘性、しまり有り、焼土の層である）

である。第Ⅶ層は、焼土であるが、焼土下は焼けておらず、B炉穴の焼土のかい出し分であるかも知れない。

Bは、95×65cmの橢円形を示すものと思われる。西壁の一部が、Aによって切られている。

深さは35～40cmを計る。焼土は、床や南側で55×60cmの範囲で確認された。

Cは、115×70cmの橢円形を示すものと考えられるが、東側は、擾乱されていて全体の形状ははっきりしない。

焼土は、やや北にかたよったところで、65×50cmの範囲で確認された。

覆土は、4層に分けられた。

第Ⅰ層：明褐色土（粘性、しまり有り）

第Ⅱ層：褐色土（粘性、しまり有り、焼土、カーボン粒子少量混入）

第Ⅲ層：褐色土（粘性しまり有り、焼土ブロック混入）

第Ⅳ層：暗褐色土（灰液入、しまりなし）

である。

遺物は、小破片が確認されている。

次項では、この文書はオーラルレポートである。各箇所の調査結果の記述が記載される。

この文書は、主として、その調査結果を記載する。



第35図 炉穴出土遺物拓影

ここでは、1、2、3号炉穴出土遺物をあげた。

1は、口縁部付近の破片である。表面は、断面三角形の細い粘土紐をはりつけ、区画し、その中に細い粘土紐でさらに区画している。表面は、貝がら条痕を横位にはしらせる。

2、3は口縁部の破片である。表面は、細い粘土紐によって区画しさらにその中を三角形を主体として区画する。中は、条痕がみたされる。なお、粘土紐の上には、格状体の圧痕と思われるものが確認される。裏面は、条痕のみである。

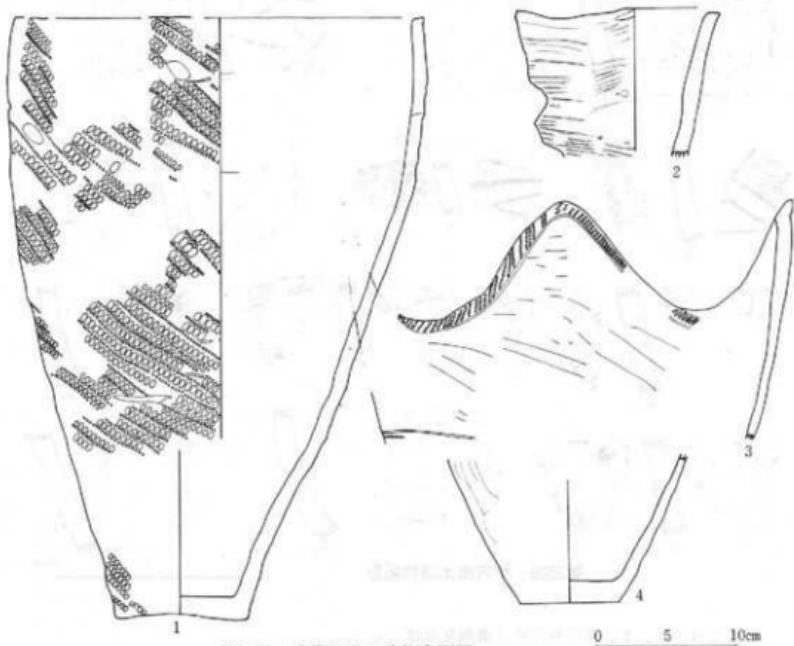
4は、粘土紐に、格状体の圧痕がない。5は、表面の条痕のかわりに沈線を施す。

6は、粘土紐の区画の中をさらに粘土紐で区画する。7も同様。

8は、底部付近の破片である。条痕が、はっきりしない。9は、6と同様。

10は、底部付近の破片。条痕は横位である。11は、胴部破片。条痕のみがみとめられる。

そのいずれも、焼成は良好であるが、胎土に砂を厚く含み、もうい。野島式に比定できる。



第36図 遺構外出戸遺物実測図

遺構外の出土遺物をまとめて説明する。(第36、37、38、39図)

遺構外の出戸遺物のうち実測可能な状態までに復元できたものは4個体ある。

1は、A地点の(3-14)グリットからまとめて出土したものである。遺物の周辺等を精査してみたものの、他に遺物はなく、遺構等のプランも確認できなかった。

深鉢式土器の一括個体である。残存率は85%程度である。

口径29.0cm、底径9.5cm、器厚0.8cmを測る。

口縁はややゆるく内湾し、胴部上端に、最大径を持ち、底部にむかってゆるやかにすぼみ、底部に至る。全体的にややゆがんでいる。

表面の文様は、L〔^r〕にR〔^l〕を巻きつけてころがしたと思われるが、底部付近は、L〔^r〕の単節斜繩文となっている。

表裏面ともに、輪積痕と思われる痕が確認される。内面には、ナデのあとが確認される。色調は茶褐色を呈し、胸部は、火熱を受けており黒くなっている。焼成は良好、胎土には、多量の纖維を混入する。

2は、口縁部の破片である。口縁部は外傾しており器厚は1.0～1.3cmを測る。色調は淡褐色を呈し、焼成良好、胎土に纖維、砂を多量に混入する。表面に条痕状の文様を施す。

3は、口縁部の個体である。B地点の住居址の周辺から散らばって出土したものである。

口径32.0cmを計測し、4つの波状口縁を呈す。現高17cmを測る。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好、胎土に長石、砂、を多量に混入する。器厚は、0.5～1.0cmを計る。

口縁部は巾1cm程の折り返し口縁で、その上にL(↑)を施す。又、ヘラケズリの痕をのこす。口縁部から頸部にかけてゆるやかに内湾し、頸部で一度くびれ、再びふくらんで、底部に至るものと思われる。頸部には二条の沈線がみられる。内面も、ヘラケズリできれいにしあげられている。

4は、底部の個体である。B地点の(I-2)グリットでまとめて出土した。

底径7.0cm、現高10.3cm、器厚0.8～1.0cm、底部の厚さ1.5cmを計る。

色調褐色、焼成良好、胎土には、長石、砂を多量に混入する。上器表内面とも、ヘラケズリによる整形がみられる。底には網代痕がのこされる。

3、4は、その形態、胎土、整形等からみると、同一個体であると思われる。

後期、加曾利B式に比定できると思われる。

次に、破片について説明を加えるものとする。(第37、38図)

5～15は、条痕文系の土器群である。ファイヤーピットの周辺から出土している。

5は、表面を細い枯土紐によって区画するという文様がみられる。6～8、10は、区画された内に条痕を充填している。裏面は、条痕のみを施す。

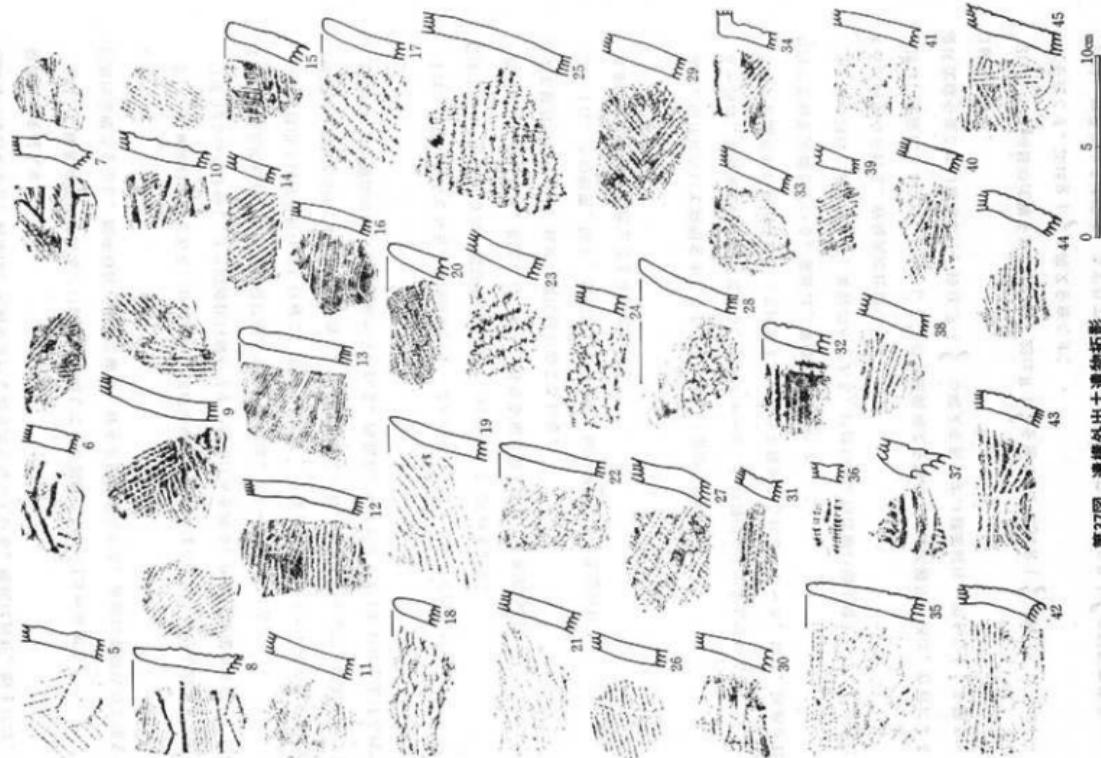
9、11～14は、表裏面とも、条痕のみである。13は口縁。15は細い胎土紐ではなく、沈線による区画がみられる。野島式に比定できる。

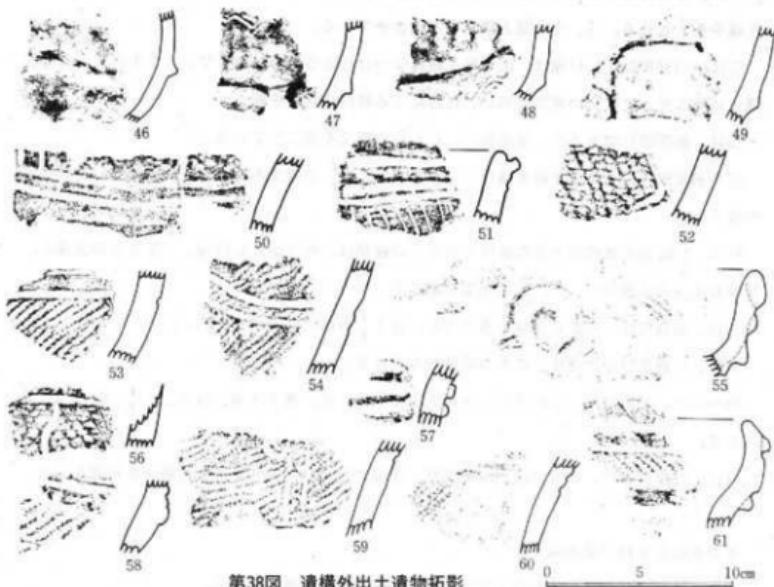
16は、沈線による文様。17は、L(↑)の単節斜綱文を施す口縁部破片。18は、竹管による波状沈線を施す口縁部破片。19は、R(ℓ)の綱文を施す口縁部破片。20もL(↑)を施す口縁部の破片。

21は、18と同様の沈線を施す口縁、22はR(ℓ)を施す。23はR(ℓ)、24は↑のループ文を施す。25はR(ℓ)の綱文を施す。

26は、竹管による沈線文。さすりであるかもしれない。27は2本のR(ℓ)の回転押捺文。

第37図 通縫外出土遺物拓影





第38図 遺構外出土遺物拓影

28は口縁部破片、ループを施す。29はL(「フ」、「リ」)の多条の羽状網文。

30は、回転押捺文。

31は、沈線文及び、爪形文。32～34は、竹管による押引き沈線文、35は、爪形文を施す。

41、45は、沈線文を施す。以上の破片には、多量の繊維を混入する。黒浜式に比定できる。

36、キャタピラ文、37は、太い沈線及び爪形文。阿玉台式に比定できよう。

38～40、42～44は、沈線を主体とする文様である。42には、地にL(「フ」)の網文を施す。

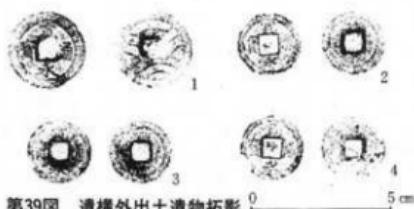
いずれも、胎土には繊維をふくまず、小砂を混入する。諸磯式に比定できよう。

46～49(第38図)は、比較的うす手の破片で、断面三角形の粘土組により、隆帯を施す。

同一個体であると思われる。

阿玉台式に比定できよう。

50～61は、B地点において出土したものである。



第39図 遺構外出土遺物拓影

50は、頭部付近の破片である。拓影が逆である。三条の太い沈線を横位にはどこし、2本の沈線を垂下させる。又、その間と縄文を充填させている。

51は、口縁部破片。口縁は、太い粘土紐はりつけによる2重口縁を呈し、2本の太い沈線を横位に施す。R | ℓ の縄文を地に、竹管による縦位の沈線を施す。

52は、胴部破片であろう。沈線及び、L | τ の縄文を施している。

53も胴部破片。2条の沈線を横位にはしらせ、R | ℓ の縄文を施す。54も同様、沈線がやや波うつ。

55は、口縁部の比較的大きな破片である。口縁部は、折りかえし口縁、うずまきの文様と、沈線によって区画内に、R | ℓ の縄文を施す。

56は、胴部破片、横位の沈線を垂下させ、R | ℓ の縄文を充填させている。

57は、口縁部付近の破片。2本の隆帯がみられる。

58～60は、胴部破片。それぞれ、沈線と縄文を施す。縄文は58、59がL | τ 、60がR | ℓ である。

61は、口縁部破片、2重口縁、隆帯及び、沈線で区画した内にR | ℓ の縄文を充填させる。

その他の出土物（第39図）

本遺跡からは、古錢が4点出土している。いずれも寛永通寶である。

寛永通寶は、寛永3年（1626年）～寛永8年（1668年）までの古寛永とそれ以後の新寛永とに大別されるが、本遺跡出土のものは、新寛永のものと思われる。

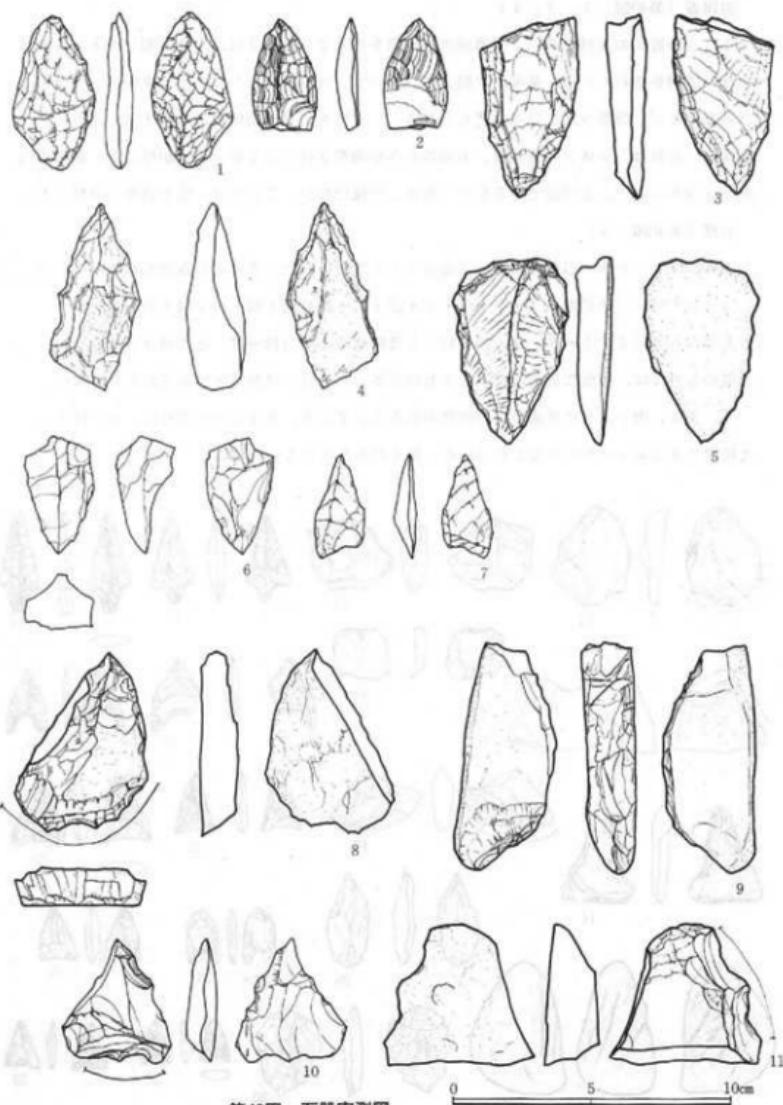
1は、背面に青海波文（11波）を付している。

2～3は、背面には、何も付していない。

字体は、総て真書体である。



第15節 石 器



第40図 石器実測図

国立科学博物館 国立博物館

本遺跡出土の石器をまとめてとりあげた。（第40図～第47図）

尖頭器（第40図、1、2、4）

1は、砂岩系の石材を用い、表裏面から調整を加えている。2は、黒曜石製である。表面はきれいに調整されている。基部が欠損しているので、はっきりはしないが、裏面は、尖頭部及び基部のみが、調整されていると考えられる。いずれも、先土器時代の所産と考えられる。

4は、表面は、全体が、裏面は、尖頭部のみが調整されているが、器厚が厚いし、調整の角度が、大きいので、尖頭器であるかどうかは、明確でない。ここでは一応尖頭器と分類した。

石核（第40図、6）

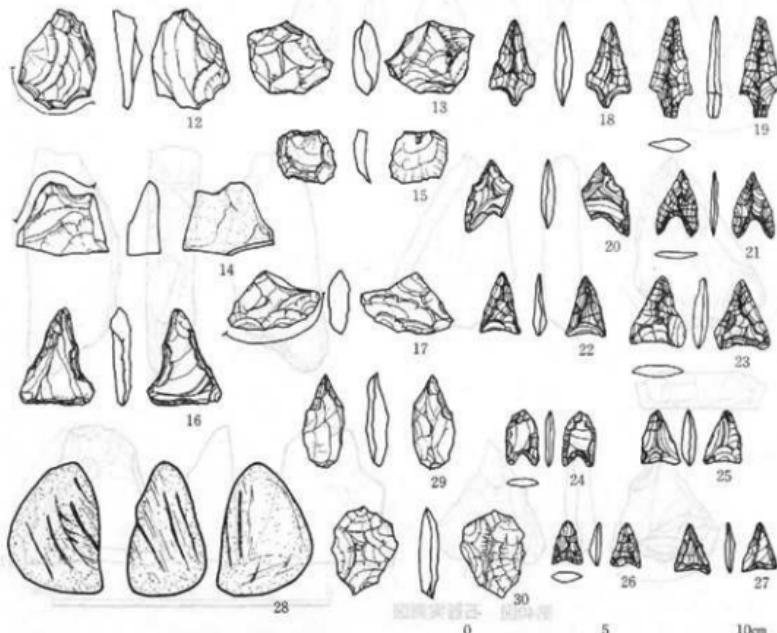
6は、チャート製の石核である。三面のフレイクをとったと考えられる面が残されている。

スクレイパー（第40図、3・5・8・9・10・11・第41図・12・13・14・15・16・17・

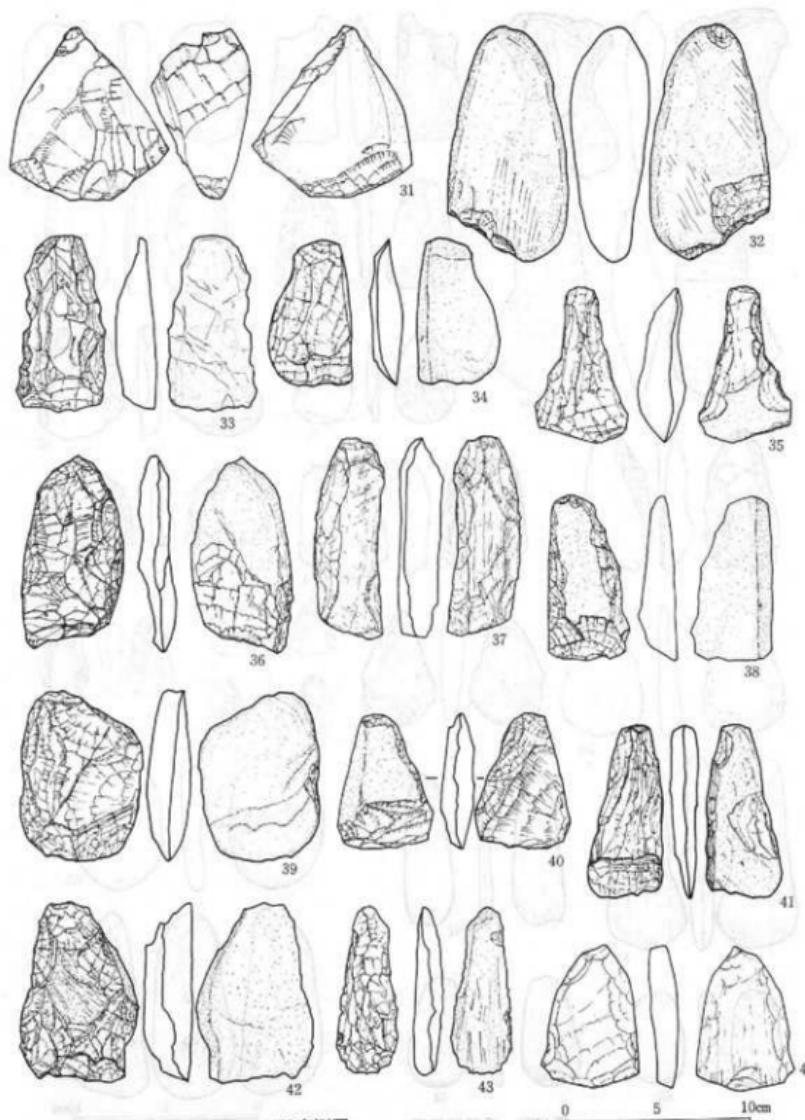
大型のもの（3・5・8・9・10・11）と母指状のもの（12～17）とに別けられる。

大型のものには、裏面に自然面をのこすものが多い。5は、打製石斧であるかもしれない。

3、5は、両サイドに裏面からの調整が加えられている。8はエンド部分に、10、11は、比較的大きなエッジが作り出されている。鍛を打ちかいたものが多い。



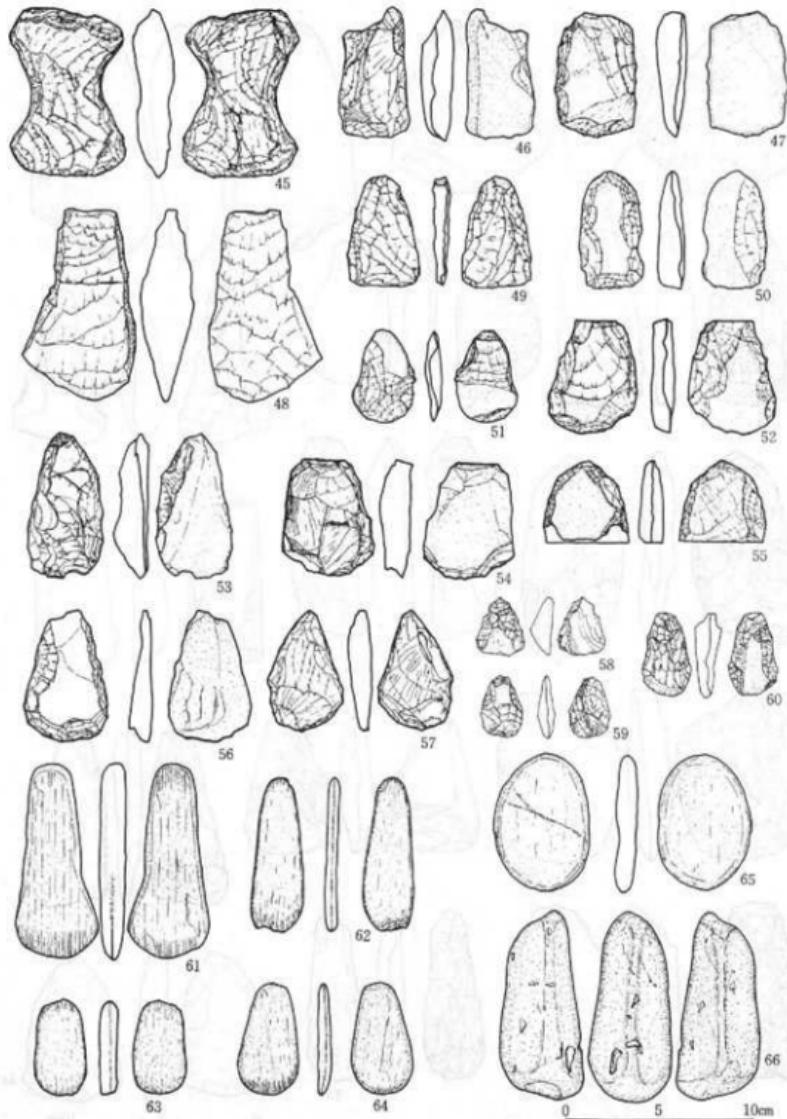
第41図 石器実測図



第42図 石器実測図

実測実測図

0 5 10cm



第43図 石器実測図

12~17は、フレイクのサイド、あるいはエンドにスクレイバーエッジが作り出されている。14には比較的大きなエッジが作られている。

石鎚(第41図・18~27)

18、19は有柄の石鎚である。いずれもチャートを利用していねいに作られている。

20、21、24は無柄ではあるが、基部の抉りが深い。21は特に丁寧に作られている。

22、23、25、26、27は、ほぼ三角形の形状を持ち、作りも粗雑である。いづれもチャートを利用している。

ドリル(第41図・29、30)

29は黒曜石製のドリルと思われる。刃部は、表裏両面から調整されている。あるいは、尖頭器であるのかもしれない。

30は、チャーチのドリルである。先が欠損している。

礫器・石斧(第42図・31~44・第43図・45~64)

礫器は、31・32の2点のみである。

どちらも、裏面から打ち欠いて刃部を作り出している。

石斧は、32点ほど図示した。打器石斧の数は30点である。

33は、裏面から調整を行っている。裏面はすべて自然面である。

34は、砂岩質の石を利用している。裏面からのみの調整である。裏面は自然面。

35は、バチ状の形を呈す。表面は、自然面をのこさず調整している。裏面刃部には、自然面をのこす。36も表面は自然面を残さない。37は、破岩系の石材を利用している。のみ状の形を呈し、表裏面ともきれいに調整されている。38は、表面のみの調整、裏面は自然面のままである。39も同様。40は表面に自然面を残す。

42、43は、裏面は自然面のみである。44は、風化しているが、裏面に自然面を残す。

45は、分銅形で、両面とも調整がある。46、47は、裏面が自然面である。

48、49、57は、両面とも調整されている。51、52、53、54、55、56、57、58、59、60は、いづれも一部に自然面をのこす。51、58、59、60は、小型の打製石斧である。

61~64は、磨製の石斧である。いづれも、よく磨かれ、刃部はするどい。

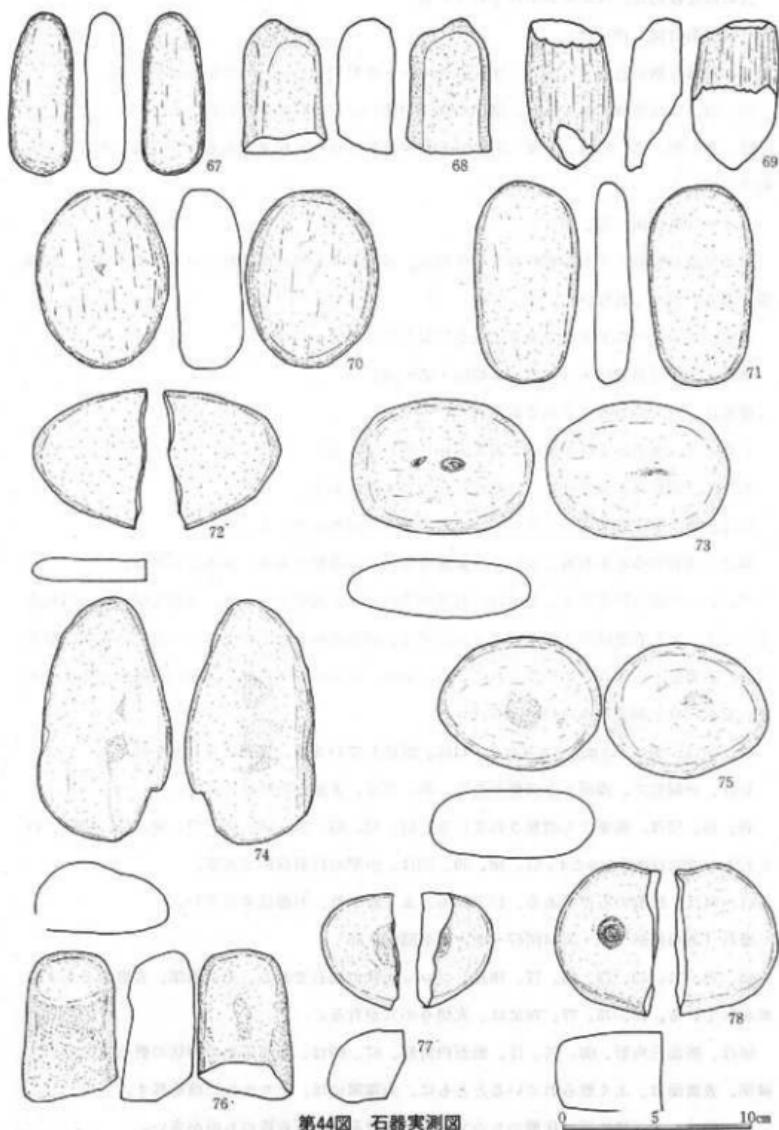
磨石(第43図65~66・第44図67~68・第45図84~85)

65、70、71、72、73、75、77、78は、コロッケ状の磨石である。その縁部、表裏面ともよく磨かれている。73、75、77、78には、火切りの穴が有る。

66は、断面三角形、68、76、は、断面四角形、67、69は、断面円形の棒状の磨石である。

縁部、表裏面は、よく磨かれているとともに、先端部には、たたかれた痕を残す。

84、85は、ほぼ球に近い状態のものである。砂岩系、凝灰岩質のものが多い。



第44図 石器実測図

石皿（第45図79～82）

すべて破片である。80、81は、かなり使用されたらしくかなりくぼんでいる。

82には火切の穴がある。

砥石（第41図28、第45図83・86～90）

磨石の内でも、数状の溝を有するもの、砸られて、あきらかに偏平になったり、えぐれたりしたものを砥石として分類した。28、83、86、89、90、溝を有する。87、88は、偏平になっている。ほとんどが、砂岩質のものである。

フレイク（第40図7・第46図91～102）

本遺跡では、多量のフレイク・チップ類が出土している。このうち比較的大きいものを取り上げた。

91は、凝灰岩の縦長剥片である。風化がいちじるしい為、剥離は明確ではないが、表面には裏面からの微調整のあとが、観察される。

92は、頁岩の縦長剥片である。砸から剥されたものであろうか、表面には自然面をのこす。表面には、裏面からの微調整と思われるものが観察される。

93は、凝灰岩の縦長剥片である。図面は、表裏が逆である。表面は下から2回の剥刃をとったあとが、裏面には、バブル、バブルスカーが残る。

94は、砂岩の縦長剥片である。裏面には打留、打留痕を残す。

95、96は、チャートの縦長剥片である。表面は、数回の剥離のあとをのこす。

97、98は、砂岩の縦長剥片である。97は、打面をかえて、剥離している。

99は砂岩の縦長剥片である。打面は上からで、断面は三角形状を呈する。100、101、102はチャートの剥片である。101、102は、図の表裏面が逆である。102には表面に自然面を残す。

その他の石器（第46図103、104）

103は、台石であろう。偏平は石を利用している。表面は、一部剥離が加えられている。

104は、スタンプ形の石器である。下部は、打たれ、平らになっている。

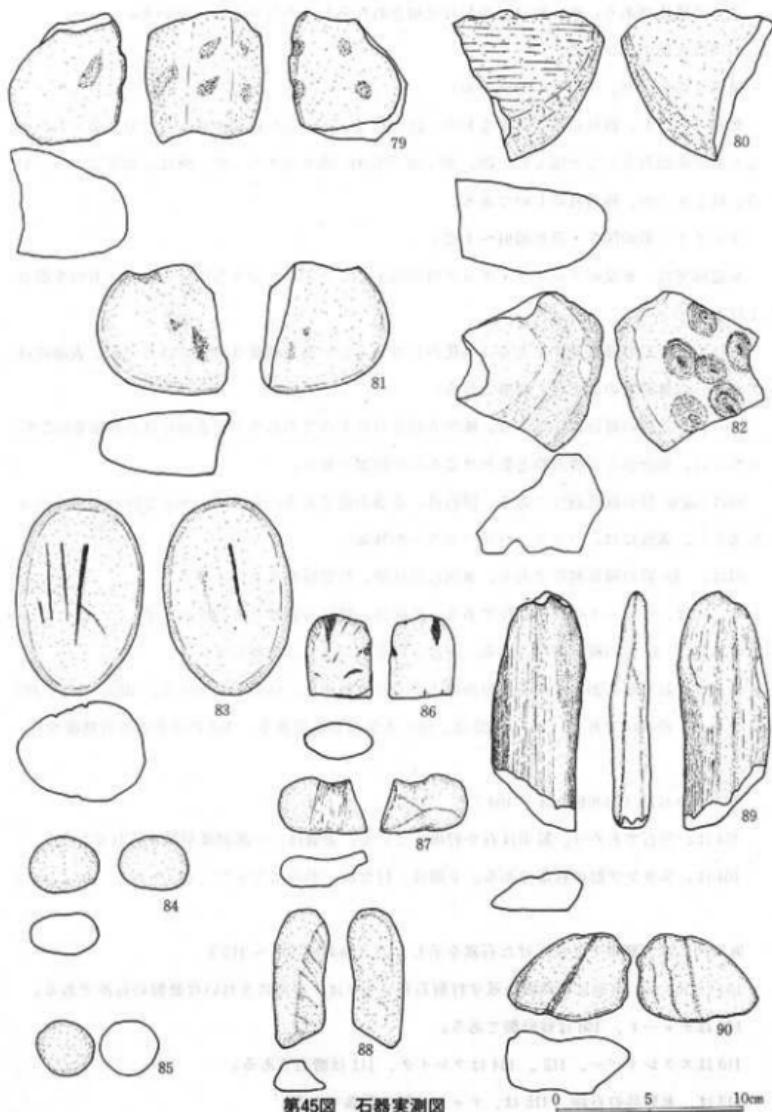
第47図には、概報でとり上げた石器を示した。（第47図107～115）

107、108は、裏面に自然面を残す打製石斧、109は、非常にきれいな磨製の石斧である。

107はチャート、108は砂岩製である。

110はスクレイバー、112、114はフレイク、111は磨石である。

113は、未製品の石皿、115は、チャート製の石匙である。

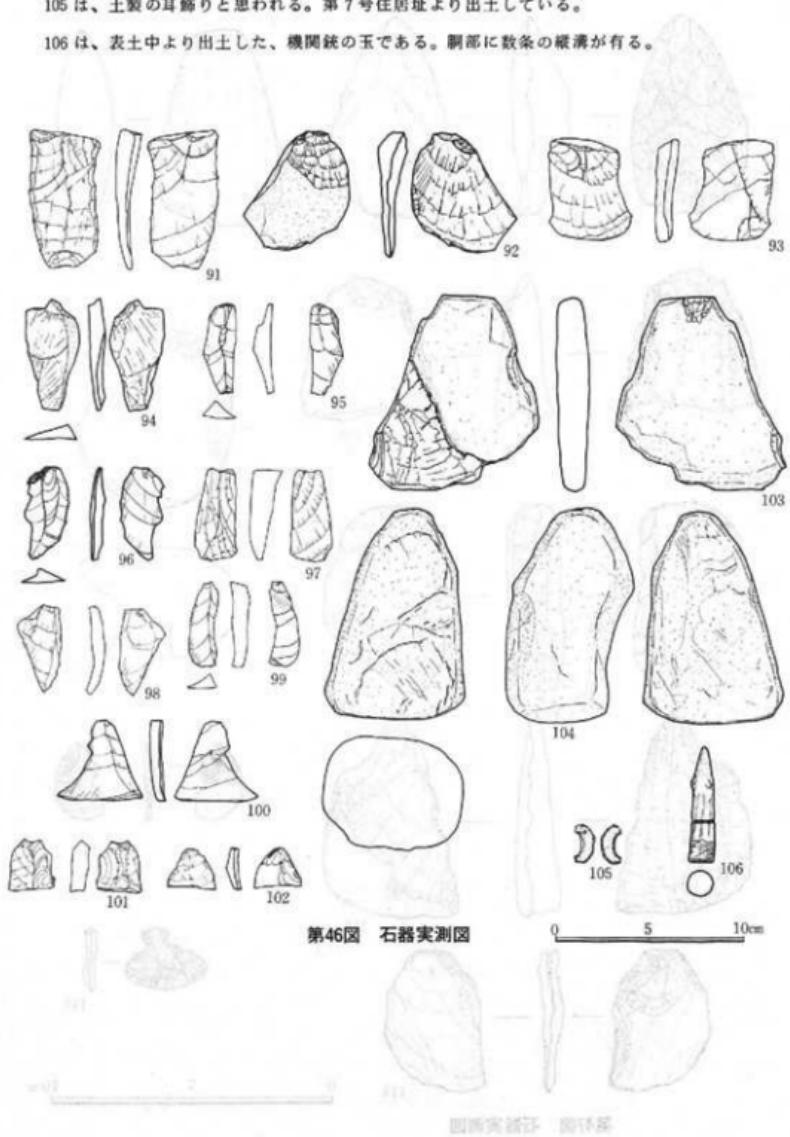


第45図 石器実測図

その他、(第46図、105、106)

105は、土製の耳飾りと思われる。第7号住居址より出土している。

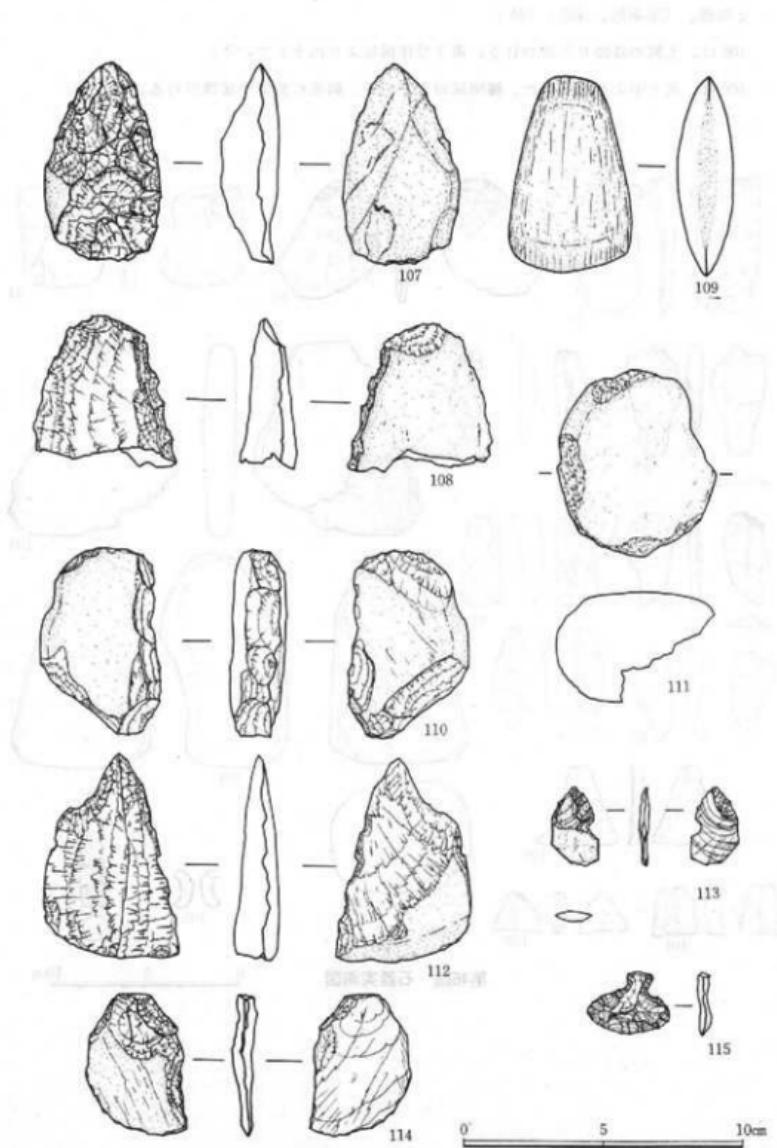
106は、表土中より出土した、機関銃の弾である。胴部に数条の縦溝が有る。



第46図 石器実測図

0 5 10cm

四面実器等 四面器



第47図 石器実測図

第6章 調査の成果と問題点

本遺跡において確認された遺構は、A地点においては、縄文時代早期の炉穴3基、縄文時代前期の住居址7軒、B地点において、縄文時代中期の住居址3軒であった。

それぞれの内容については、前章でくわしく述べたので、ここでは、いくつかの問題点を指摘してまとめてかえたい。

本市において、大袋Ⅱ遺跡の発掘調査は、初めて行なわれた組織的な発掘調査であるため、比較参考すべき資料は少ない。

I 炉穴について

本遺跡では、台地上の西端部に、まとまって炉穴群が確認された。炉穴群が確認されたのは群馬県内において、板倉町、海老瀬貝塚、月夜野町遺跡について3例目である。

本遺跡の炉穴を概観してみよう。

本遺跡の炉穴群は、1号炉穴が、8基、2号炉穴が1基、3号炉穴が、3基の切り合がみられる。合計すると12基の炉穴が、集合している。

形態的にみると、だ円形、円形を基本とする。又、炉穴全体に焼土が、確認されるものは、少ない。だ円形のものは、南北よりも東西に長いものが多い。焼土は、それらの炉穴の、西壁近くから確認されるものが多い。1号炉穴Fは、本遺跡の炉穴の内、唯一煙り出しを持つ。

次に、炉穴群の選地についてふれてみたい。一般的に炉穴群が、作られるのは、風を下からうける斜面が多い。しかしながら、本遺跡では、平坦な台地上の、斜面向って作られている。

現在、館林地方では、西風の吹く日が多いが、本遺跡の炉穴には、西壁にそって、焼土がみとめられるという現象が確認されている。1号炉穴Fは、やはり西側に煙出しを有している。

これらは、当時の環境を復元する上で、参考になると考えられる。

II 住居址について

本遺跡において確認された住居址は10軒である。

このうち、A地点においては、縄文時代前期、黒浜式土器を伴う住居址7軒を確認した。又B地点においては、縄文時代中期、加曾利E式土器を伴う住居址3軒を確認した。このうち2軒には、炉の確認があったが1件については不明である。

前述のごとく、本市において、縄文時代前期の遺跡は、城沼の南岸に集中する傾向を持つが本遺跡では、その一端を確認することができた。

まず、前期の住居址の配置をみてみたい。

A地点は、前述の通り、平坦な台地であり、やや東へ緩傾斜している。

しかしながら、西側の斜面（BグリットからAグリットにかけて傾斜する）は急であり、水田

第3表 炉穴一覧表

炉穴名	長 軸	短 軸	深 さ	長軸方位	平 面 形	焼 土 の 位 置	切り 合 い 新 旧	備 考
第一号炉穴	A	130	70	65	N-86°-W	小判形	西壁寄り	最も新しい
	B	(95)	90		N-84°-W	不整円形	西南壁寄り	Aより旧、D、Eより新
	C	115	65	70	N-63°-W	小判形	西壁寄り	最も新しい
	D	(100)	(85)		N-15°-W	不整円形	床中央	B、Cより旧、Eとは不明
	E	120	(70)	40	N-67°-E	だ円形	西壁寄り	A、Bより旧、Dとは不明
	F	100	90	55	N-15°-W	不整だ円形	北壁寄り	Cより旧
	G	(120)	90		N-85°-W	不整だ円形	床ほぼ全面	Cより旧
	H	100	80		N-65°-W	不整円形	床ほぼ中央	切り合い無し
第二号炉穴	A	155	130	45	N-26°-E	不整円形	床ほぼ中央	切り合い無し
第三号炉穴	A	130	100	45	N-88°-E	不整だ円形	西壁寄り	Bより新
	B	90	(70)	40	N-5°-E	だ円形	床全面	Aより旧、Cより新
	C	115	(70)	40	不 明	だ円形(?)	北壁寄り	Bより旧

面との比高は約2mを計測する。又、北側は（G、H-2）グリットにかけて、谷が入り込んでいる。

これらの地形的判断をもとに、住居址の配置を考えると、これらの住居址は、台地の西及び北の縁辺に存在するといえよう。又、その長軸はいずれも、南北を中心している。

2号住居址では、3軒の切り合いがみとめられた。これにより本遺跡の前期の住居址は、3時期にわたって作られていたことが予想された。

このため、出土遺物、住居址の形態により3時期の区分を行ってみた。

しかしながら、土器による3時期区分は、明確に出来なかった。ただ、その文様から、1、繩文を施こすもの、2、2本の原体の回転押捺を行うもの、3、竹管により沈線を施こすものの3大別が出来たが、住居址別に、明確に分類できるものではなかった。

住居址の形態的に見てみると、明確に分類できるものは、第2号A住居址、第3号住居址のような大型の住居址が分けられる。これら大型住居址は、調査区の北部に位置している。

どちらも壁溝は、有さず、炉は、かなり北によった位置に作られている。

次に、小型のものは、隅丸の台形のものと、長方形のものに分けられる。

台形のものは、調査区の中央部に存在する第6号住居址と、第7号住居址である。第4号住居址もこの中に入るかもしれない。そうすると、調査区の南西に分布することになる。

方形、長方形のものは、調査区の東側に位置する、第2号B、C住居址、第1号住居址、第5号住居址である。

これら小型の住居址の内には、壁溝を有するものと、そうでないものとがある。

有するものは、第2号B、C住居址、第6号住居址で、調査区の中央部に分布する。

しかしながら、形態の分類が、土器の分類と明確に一致しておらず、時期設定までには、至らなかった。再度検討を加えてみたいと思う。

次にB地点の中期の住居址についてであるが、前述の通り、A地点においては、中期の住居址は確認出来なかった。このため、中期の住居址については、その分布が明確でない。

しかしながら、B地点は、住居址の確認された3ライン以南は、緩傾斜しており、これらの住居址は、本台地上の南端に位置するものと考えられる。

III 石器について

本遺跡出土の石器について、いくつかの問題点を指摘したい。

本遺跡出土の石器数は、非常に多い。実測したものだけで112個あった。このうち、特筆すべきことは、打製石斧である。

本遺跡出土の石斧のうち実測したものは、35個である。このうち打製石斧は、30個である。これら打製石斧の特徴は、片面調整のものが、大多数である。

第4表 住居址一覧表

住居No	規 模	形態・平面形	主軸方位	壁 溝	柱 穴	炉	規 模	備 考
第1号住居址	520×465 cm	長方形	N-25°-E	無し	8本	北にかたよる・地床炉	65×50cm	南壁調査出来ず
第2号 住居址	A 696×450 cm	長方形	N-28°-E	無し		北にかたよる・地床炉	75×65cm	本遺跡最大
	B 350×350 cm	隅丸方形	N-28°-E	全周	23本	北にかたよる・地床炉	140×110cm	Aより古い
	C (350×350 cm)	(隅丸方形)	N-8°-E	全周?		ほぼ中央北より・地床炉		Bより古い
第3号住居址	570×465 cm	長方形	N-46°-E	無し	16本	北へかたよる・地床炉	60×60cm	大型住居址
第4号住居址	445×395 cm	不整長方形	N-16°-E	無し	10本	北東へかたよる・地床炉	100×95cm	北側調査出来ず
第5号住居址	(385×415 cm)	(長方形)	N-51°-E	無し	7本	南東へかたよる・地床炉	(100)×110 cm	西側半分調査出来ず
第6号住居址	(520×480 cm)	隅丸台形	N-16°-E	全周	10本壁柱5本	北へかたよる・地床炉	(120)×90cm	北東コーナー調査できず
第7号住居址	450×440 cm	隅丸台形	N-7°-E	無し	27本	北へかたよる・地床炉	80×70cm	
第8号住居址	426×380 cm	だ円形	N-22°-E	無し	6本	ほぼ中央・埋甕炉	37×32cm	B地点
第9号住居址	460×416 cm	だ円形	N-52°-E	無し	8本	北へかたよる・地床炉	75×50cm	"
第10号住居址	360×300cm	不整円形	不明	無し	6本	なし		"

表面は、そのいづれもが、きれいに調整していあのに対し、裏面は、ごく一部の調整か、もしくは、全面に自然面を残す。これに対し磨製石斧は、両面とも、よく磨かれ、きれいに、仕上げられているのに対し、打製石斧については、幼稚な作りのようである。

このことは、打製石斧と、磨製石斧の機能の差を表わしているのかもしれない。

この他に本遺跡では、尖頭器、石核、スクリーバー、石鎌、石錐、石斧、礫器、砥石、磨石、凹石、石皿、スタンプ型石器、フレイク等が出土している。

これらのうち、尖頭器、石核、フレイク類は、先土器時代の所産のものと思われる。

明確に土層が確認されたものは、2の尖頭器のみである。その他は、縄文時代の土器、石器類と同一土層から出土したものである。しかしながら、フレイク類には、その技法等から、先土器時代のものと考えられる。これらのフレイクの中にも、表・裏面に自然面を残すものが多い。

石器類を概観するならば、本遺跡出土の石器類は、自然面を多くのこし、打整石斧を例にとって、粗雑で、幼稚な作りものが多いように思われる。

以上、本遺跡の遺構、遺物について、いくつかの特徴を上げてみた。

しかしながら、本市において最初の本格的な発掘調査であり、本報告書作成までに、時間的余裕も少なかったことから充分な、検討ができなかった。

諸方面からの御指摘をいただければ幸いである。

参 考 文 献

- 「館林市誌」 歴史編・自然編、館林市誌編集委員会 昭和44年
- 「館林双書」 1・2・3・4・6巻、館林市立図書館
- 「群馬県遺跡合帳」 I、東毛編、館林市・群馬県教育委員会 昭和46年
- 「群馬のおいたちをたずねて」上・下、木崎喜雄他著、上毛新聞社
- 「遺跡は語る」—よみがえる群馬— 每日新聞社、前橋支局
- 館林市埋蔵文化財調査報告書 第1集 「大袋II遺跡」(A地点)発掘調査概報 館林市教育委員会 昭和56年
- 「大塚・間之原遺跡確認調査の概要」—第2次調査— 太田市教育委員会 昭和56年
- 「打越遺跡」富士見市教育委員会
- 「田中谷戸遺跡」 町田市田中谷戸遺跡調査会 1976

写 真 図 版

写真1 遠林の遠景

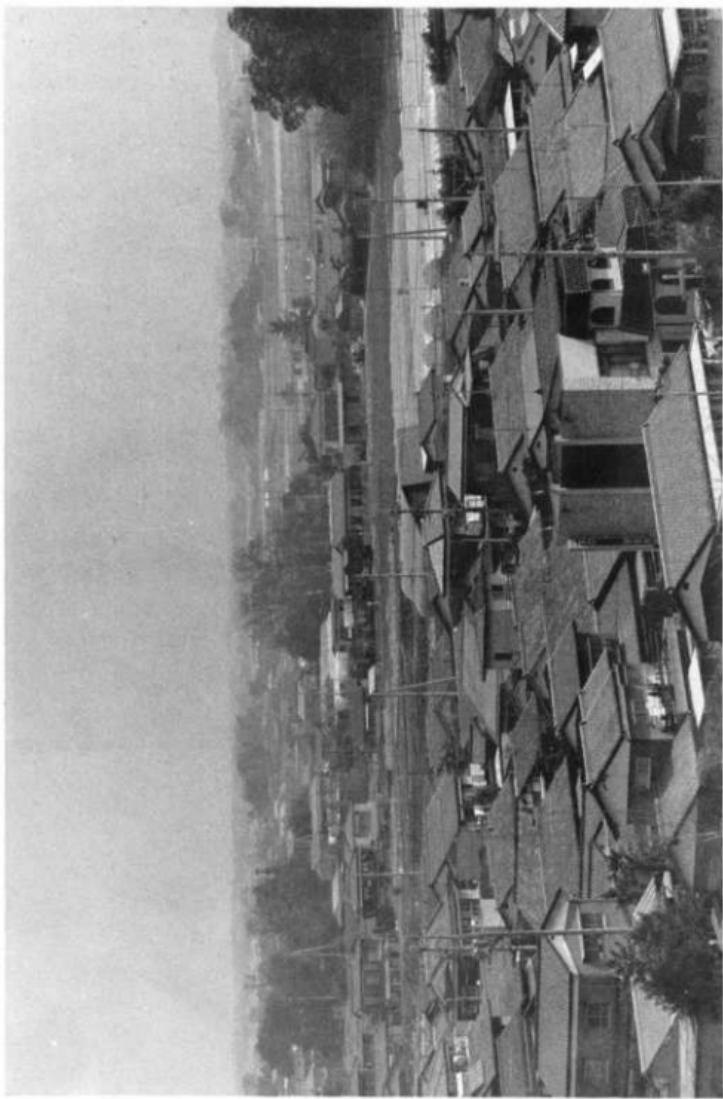




写真2 遺跡近景（A地点）

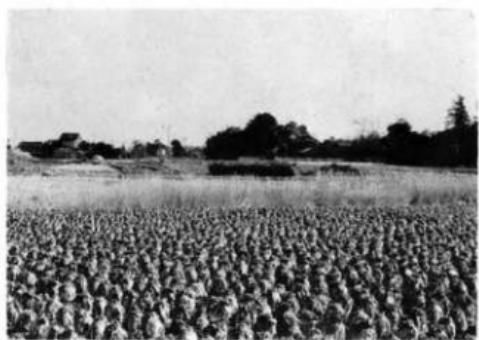


写真3 遺跡近景（B地点）



写真4 遺跡近景（C地点）



写真5 発掘風景（A地点）



写真6 発掘風景（B地点）



写真7 発掘風景（C地点）



写真8 第1号住居址



写真9 第1号住居址 土層断面

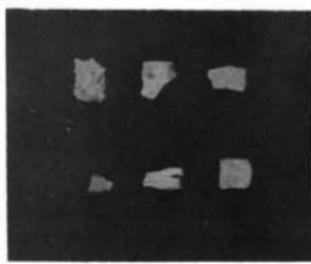


写真10 第1号住居址出土遺物



写真11 第2号住居址

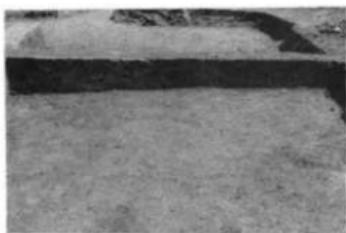


写真12 第2号住居址土層断面



写真13 第2号住居址出土遺物

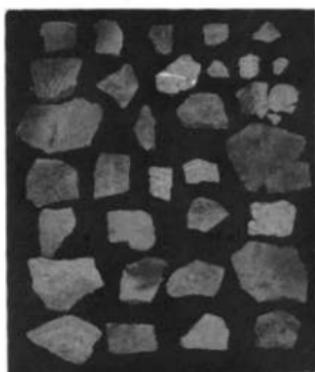


写真14 第2号住居址出土遺物



写真15 第3号住居址

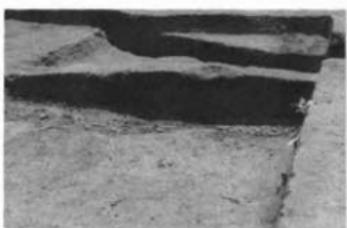


写真16 第3号住居址土層断面

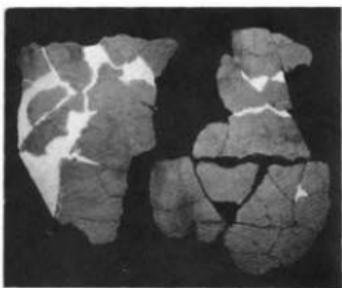


写真17 第3号住居址出土遺物



写真18 第3号住居址出土遺物

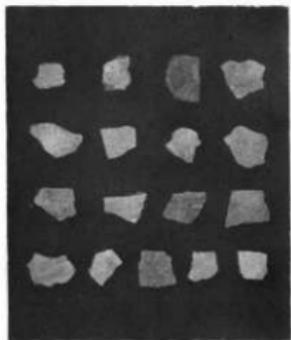


写真19 第3号住居址出土遺物



写真20 第4号住居址



写真21 第4号住居址土層断面



写真22 遺物出土状況



写真23 第4号住居址出土遺物



写真24 第4号住居址出土遺物

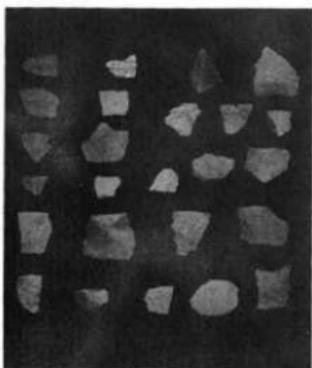


写真25 第4号住居址出土遺物



写真26 第5号住居址土層断面

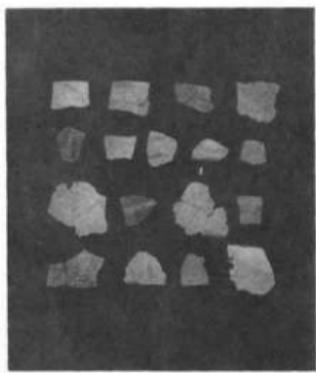


写真27 第5号住居址出土遺物



写真28 第6号住居址



写真29 第6号住居址土層断面

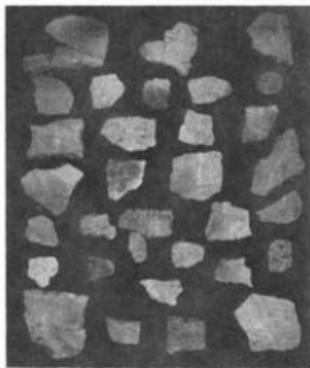


写真30 第6号住居址出土遺物



写真31 第7号住居址

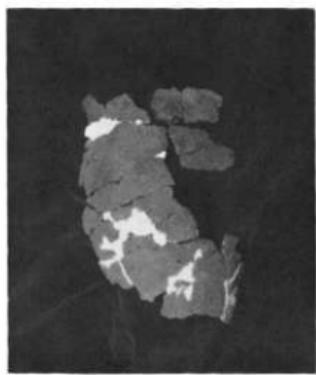


写真32 第7号住居址出土遺物

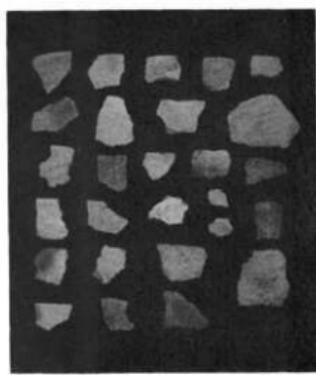


写真33 第7号住居址出土遺物



写真34 第8号住居址



写真35 遺物出土状況



写真36 遺物出土状況



写真37 第8号住居址出土遺物



写真38 第8号住居址出土遺物



写真39 第9号住居址



写真40 第10号住居址



写真41 第1号炉穴



写真42 第1号炉穴土層断面

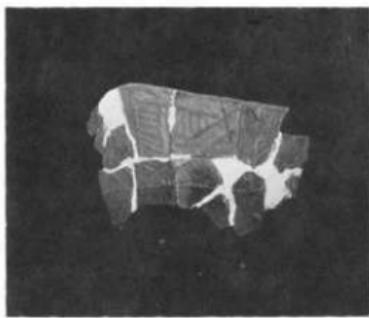


写真43 第1号炉穴出土遺物



写真44 第2号炉穴



写真45 第3号炉穴

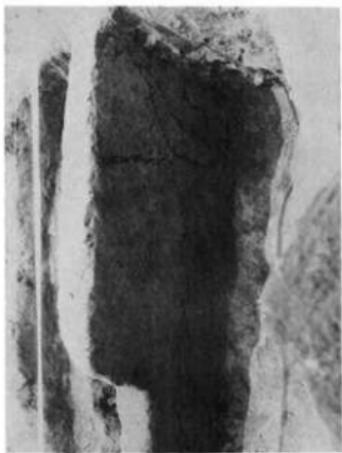


写真46 第3号炉穴土層断面

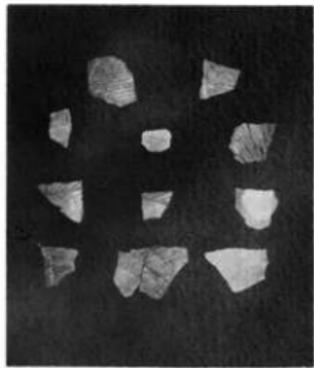


写真47 炉穴出土遺物



写真48 遺構外出土遺物

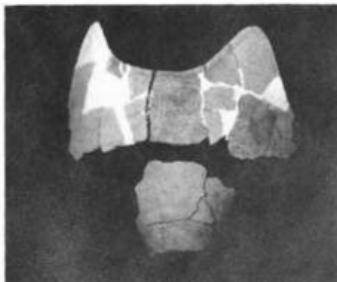


写真49 遺構外出土遺物

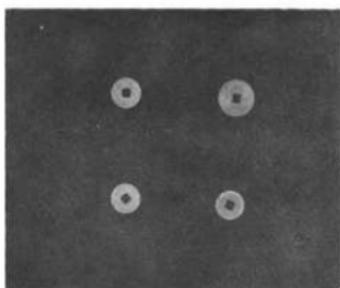


写真50 遺構外出土遺物

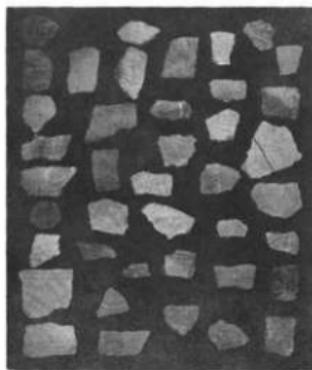


写真51 遺構外出土遺物

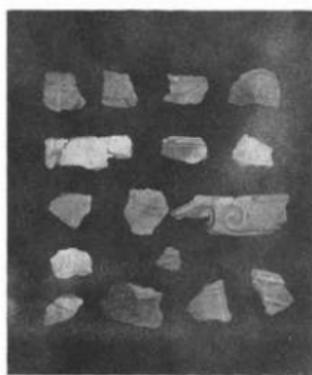


写真52 遺構外出土遺物



写真53 石 器

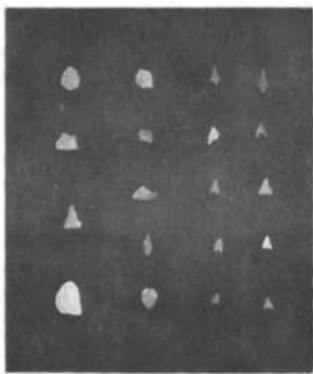


写真54 石 器

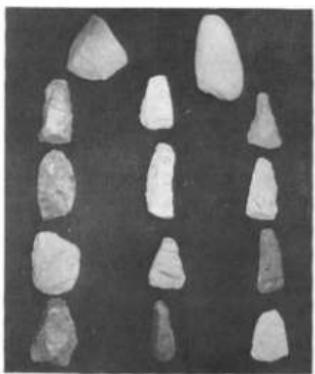


写真55 石 器

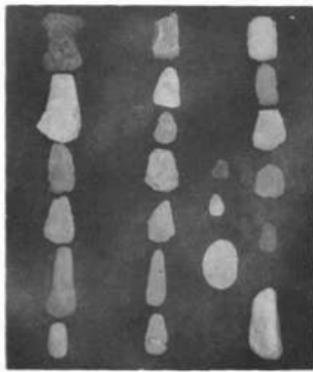


写真56 石 器

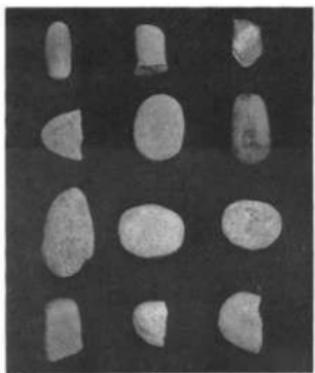


写真57 石 器



写真58 石 器



写真59 石 器

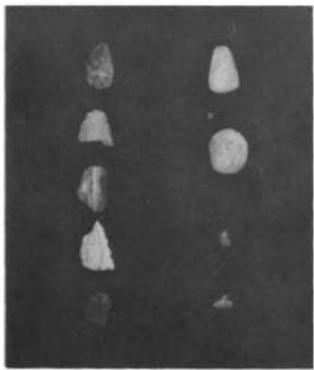


写真60 石 器

写真61 講壇終了後の遺跡



正 誤 表

ページ	行	誤	正
序	8	花吹いた	花咲いた
32	13	少 破	小 砂
32	14~15	文様は	文様は風化して明確ではないものの $R\{L\}^r$ の繩文で羽状の効果を出す。
32	31	$R\{L\}^r$	$R\{L\}^r$
34	6	の繩文	$L\{r\}$ の繩文
34	7	突 文	刺突文
38	5	$L\{R\}^l$	$L\{R\}^l$
39	9	$L\{R\}^l$	$L\{R\}^l$
63	9	複 縁	腹 縁
69	32	さすり	おもり
83	9	月夜野町遺跡	月夜野町

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

大袋 II 遺跡

発掘調査報告

発行 館林市教育委員会

文化振興課 文化財保護係

印刷 曽我印刷株式会社

昭和57年3月31日